

---

# Miss.フォーチュン      自律気球編

平塚誠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M i s s ・ フォーチュン      自律気球編

### 【Nコード】

N 2 1 5 6 X

### 【作者名】

平塚誠

### 【あらすじ】

その星には305の国と10568の地方政府があり、3つの社会形態である資本社会、共産社会、循環社会をそれぞれの地方政府が採用している。星の砂漠化が深刻になっていたのだが、国際連合が4年毎に1年間を星の環境保全に充てることを決定し、さらに「人格プログラム」という人間の知性を備えた「自律気球」と人が力を合わせ砂漠に「森」を生み出すことで明るい希望も見え始めてきた。しかし国連にて、新たに3つ異なる社会形態の間で互いに人を送りだす三社会交流が提案された日、世界各地で自律気球の墜

落事故が相次ぐ。この不可解な問題を解決すべく、国連は新人の才女、フォーチュンに指揮を委ねる。

## ブローグ

「ミグ、ここらへんで降りようか。あなたもずっと飛んでいて疲れたでしょ？」

フォーチュン・ブリッチマスターは自分の気球がしゃべらないことは十分わかっていても、いつも話しかけるようにしている。

その気球に、搭載された「人格プログラム」で人とのコミュニケーションも可能なのだが、ミグだけではなく、世界に100億もある自律型気球は仲間同士で通信しても1機として人と話すことはない。

ミグの仲間たちは日も暮れようとしている黄色い空の向こうで、群れを成してせっせと働いている。

「あなたの仲間たちはずいぶん頑張ってくれたわね。あんな砂漠化状態からここまで新しい森が育ってきている。・・・私たちも頑張らないと駄目ね」

彼女は決して揺らぐことのない信念を持っている。それは瞳の一番奥に宿しているため真正面から見ない限り見えることはない。

その目で、砂漠から新しく生まれた森を、ミグの仲間を、ミグを、最後にミグの白い機体に映ったばやけた自分の姿を見る。自分に課せられた物は果てしなく大きい、それを全うする力は手中にある。

夜になり、風が吹き荒れる砂漠の真ん中にフォーチュンはいた。

テントを横にして一人きりでも、あまり寂しくはない。夜をにぎやかにする音楽を流しているわけでなければ、夜になって動きだす動物が生活を楽しんでいるからというわけでもない。

なにせここは生物の存在すら許さない場所だ。それなのに何故だかフォーチュンは誰かに見守られているような錯覚すら感じてしまう。

それは、恐らくたくさんの自律気球が一生懸命、彼らにしては珍しく仲間内ですら無口になって星空を埋め尽くし働いてくれているからだ。

この砂漠は序々になくなろうとしている。

元々、豊かな緑が生い茂っていたのだが、失政により砂漠化が急進行。

そこで「人格プログラム」が搭載されている自律気球の出番となる。

建築資材などに加工して使われる砂を自律気球がいろんな地方へ持ってゆき、代わりに他の森から少しずつ分け与えられた貴重な土を、科学者とデータ会議を重ねながら慎重に運び入れていく。

かつて死の砂漠といわれたその場所は、時間をかけた彼らの活躍でそれなりの森へと変わってきたのだ。

まだその森は満ちあふれんばかりの生命力こそあるわけではないが、その姿はまるで自分の存在を、生命の根源的な部分を燃やしながら証明しているように見え、今までにない魂を生み出そうとしているかのようでもある。

そして新しい魂は、自律気球や人に「自分」を生み出した理由を常に聞き出そうともしてくる。

自律気球たちは自分なりの行動で応え、人は砂漠化に至った経緯を過去を遡りながら探り、それを省みることによって応えていくことを決めた。

森はどのように成長していくのだろうか。

一夜明け、今度はそんな新しく生まれたばかりの森の中でフォーチュンは両手を頭に乗せて寝そべっている。

静かな風の中にも、かすかに痛みを与える何かをフォーチュンは感じとっていたが、それは時間が進むごとに、フォーチュンの予想を裏切り、やわらかく、しなやかに、そして親しみを待って迎えられるまでになっていく気がする。

（いい時代にも、できるものなんだな）

そんな気持ちにさせた風はいつか止み、木々の隙間からぎらつく第一恒星からの光がフォーチュンを襲う。

光はフォーチュンのまぶたを突抜け、「この光を受け止められないのならば木にでも隠れているか、うつ伏せにでもなっている」とでも言うようであったが、1羽の鷹がわずかにその日差しを代わりに受け止め、彼女の自律気球もゆっくりとその光を遮る。

周りの生物や自律気球が、彼女に試練を与える前につかの間の休息を与えているかのようでもある。

まだまだ砂漠は残っている。この場所にも森と砂漠の境目があり、フォーチュンの目にはその境目が昨日ミグの機体にばやけて見えた自分と重なる。

「ミグ、あの境目を簡単になくしては駄目よ。あれはあなた達ではなく、あれを作り出した人間全員が全てを理解してからでないと消してはいけないものなのだから」

ミグにも言葉はわかっているはずだ。そうフォーチュンは信じている。ミグとデータでのやりとりはできるのだが、やはりフォーチュンは話しかけるようにしている。伝わっていると感じる事はできないのだが、ミグの魂のようなものには必ず届いているはずだから。



## はじめからのロード

「君には今日から正式に国際連合政治局でニーナ共和国のタケニア資本社会地方にて先頭に立って働いてもらう。1年の非正規経験だけでは不安もあるだろうから部下に君の上司だったヒトコラ君と一緒に働いてたアルデちゃんも含めた5人をつけといた。しっかり頼むぞ」

レジキント連邦王国、いまだ砂漠化状態のパジク循環社会地方にある国連本部で、フォーチュン・ブリッジマスターは突然の辞令に何をどこから聞けばいいのかすら思いつかない。確かに国連で働けることは悪い話ではないが、初仕事からロード（責任者）をやらされ、しかもそこは、あまり知らない土地。さらに元の上司と先輩を部下につけてなどとは予想するわけもなければ聞いたこともない。

今から1年前。

あこがれの国連関係の仕事に期待を胸ふくらませ、22歳のフォーチュンはここ、パジク地方で働いていた。それは初めからロードのミスで最悪の状況に巻き込まれてしまうというものだった。

パジクに着いてから始めに村長の家を訪れた時、入り口には村の守り神である青い翼を背負う端正な顔つきの女神像が置いてあった。入り口から家に入った瞬間、何を思ってたかフォーチュンに振り返ったロードはその像にぶつかり、倒し、翼を折り、最後に無事であった顔も、バランスの崩れた体を立て直すのと引き換えに粉々にしてみせた。

それから村人の政治局を見る目が変わったことはいうまでもない。

数々のトラブルが生まれていったわけだが、そこは政治局の懸命な頑張りによって村民の信頼を回復していった。

そして落ち着いて通常の仕事をしていると、今度はフォーチュンがあまり納得がいかないものが出てくる。こうした方がよいのでは？ こういう狙いに見てみてはどうか？ と常に意見なのか文句なのかよくわからない提案をしてしまう。仕事そのものはなんとか無事に、何気に上手く終えることは出来たのだが、フォーチュンは

（あんまり私には合わないのかもしれないわね。せつかくの国連の仕事だったけど、やっぱり理想と現実は違うものか。私ならもっと上手くやってもっと仕掛けを作っておかないと気もすまないし第一、面白くないのよね。他の人が楽しくても私が楽しくなければ意味ないわ。逆も嫌だけど）

と、次は何して働こう？ 確かNPOで新しくビジネス創出機構が出来たからあそこにしようかな？ など考え始めていた。

そんな時、急に政治局の事務次長から昇格試験の話もらい、たいした考えることもなく試験を受け、たいした間を空けることなく事務次長室に呼び出され、何の話かなくらいの気持ちで来てみると先ほどの話が転がり込んできた。

（なにがどうなってるの？ この組織は？ 本当に国連よね！？ 1年のキャリアで知らない土地で先頭に立って働け？ 元上司を部下？ 冗談にしてもやりすぎじゃない！）

すっかり混乱してしまった状態で出た答えは、とにかくこの破天荒な辞令に対し、あらかじめ聞かされなければいけない話が山積みになっており、フォーチュンの頭の中ではこの話自体が崩れかかっているということだ。

「えーっとスギモリ事務次長。まずこの仕事を受ける前に私たちはもう少し話合わなければいけないことがありますよね。国連政治局で正式に雇っていただけのお話を戴けたことはありがたいことですし、精一杯頑張らせていただきたいという気持ちもあります。．．．ですが何故いきなり私がロードなんですか？しかも散々私とやりあってきた元ロードを部下にしてですよ？それに初仕事をあの自律気球の墜落事故で矢面に立ちそうなの、あのタケニアからですか？」

自律気球は2000年ほど前に開発された「人格プログラム」という人間の知性を持つ気球だ。その自律気球の墜落事故が続いていることは世界のトップニュースとなっている。生産、管理を基幹産業としているタケニアは対策を余儀なくされている状態だ。

「第一、ここの履歴書にはたいした事は書かなかったし、私も自分のことを詳しくメンバーの人に話した覚えもありません。どこの馬の骨かもわかんない私をいきなり使おうなんて事務次長、度胸が良いいにも程があるんじゃないですか？」

挑発するような言葉使いで話したのだが、事務次長は何故かニヤニヤしている。隣の秘書もピクリとも表情を変えない。50代半ばくらいで、がっちりとした体に、笑うにも怒るにも都合の良さそうな顔の事務次長には「いやー怒った顔も中々だねえ」とでも返されそうなの、雰囲気だ。

（いつもこんな事を行っているのか？いやいや、アルデさんや他の年配職員からも2、3年でロードになった人の話は聞いたけど1年目からなんてありえない。新人職員は全員騙されるとつきり初仕事

??・・・国連も自力で稼ぐようになってからずいぶん力をつけてきてるけど、こんな面白いことできるようになったのかしら)

しかし、冷静に考えてみればロード経験たつぷりのヒトコラもいるわけだしアルデも優秀だ。それに2人は以前タケニア地方の仕事をしたと言ってたから、特に自分ができなくてもなんとかなる気がする。それに、こんな試みが国連の正式な仕事なのだから、いい時代になったというのか面白いことは確かだ。

フォーチュンは「ええいっ!」と心の中で一声かけてから、この話に乗ってみることにしてみた。

## アルワールの気配り

「わかりました。事務次長。任せてください。タケニア地方には私が政治局をなめるな！とばしつと言ってきてやりますよ。前任の方はリコリネさんでしたよね。リコリネさんネクラだからタケニアのみなさん、もうすっかり好き勝手なことやっているみたいですね。私がいくらネクラの言う事だからって忘れていいのと悪いのがあるつてのを叩き込んでやりますよ！」

悪ノリは悪ノリが一番だろ、と調子に乗ったフォーチュンだったが、事務次長は、あまり格好のいいとも似合っているともいえないお互いの国連のユニフォームには目を向けず、まっすぐフォーチュンの目を見ながら答えた。

「・・・そうこなくちゃな。やはり君とは話が早くて助かる・・・そうそう！！言い忘れてたが君の昇格と同時にネクラのリコリネさんも事務次長補にしておいた。君の直属の上司になるわけだが、なんなら来年あたりあいつも君の部下にしていぞ。そしたら再来年は俺がお前の部下になっちゃうけどな。がはははは！」

（がはははは！って。しかも結局なにも話をしないうちにタケニア行きが決定しちゃったし。あーあ、ネクラのリコリネさんが上司でわけわからず屋のヒトコラさんが部下か・・・アルデさんに丸投げして私は高見の見物でもしようかしら）

ともかくいくらどつきり企画に乗るのだとしても詳細を聞かなければ何も動けない。

だが事務次長は

「後の詳しいことはリコリネに聞いてくれ。あと、ほれ。なんか困ったことがあればこの番号に電話しろ。私への直通だ。事務総長や各事務次長、各機関への協力が必要なときは、まずはリコリネに相談しろ。どうしても埒があかない時だけこっちに電話してくれればいい。その他のことでもかけてきていいが、こう見えて私もいそがしい身だ。ちょっと恋に破れたとかでは電話するなよ。がっははははっ！」

と笑い声だけを残し、さっさと部屋を出て行ってしまった。

ここはあんたの部屋だろ、私を置き去りにしてどうするという顔をしていたフォーチュンを、秘書の人がまたこんなことをするという顔で対応してくれる。

「スギモリが失礼をしました。ではこれから事務次長補室までご案内致します。私はスギモリの秘書をしているアルワールと申します。これからしばらくスギモリに代わって今回の仕事のサポートをさせていただきますのでよろしくお願いしますね」

事務次長とは正反対でとても丁寧な話し振りだ。

女性は30歳を少し超えたくらいだろうか。

長い髪を細かなアクセントを効かせながらまとめあげ、いろんな

状況に即座に対応してきたことを語る整った顔、凜とした姿からは几帳面さや意志の強さなどを感じる。ユニフォームも何気に、少なくとも事務次長やフォーチュンよりは似合っている。

「いつもああいう感じなんですか？」

「まったく困っちゃいますよね」。私もなんも教えられずにこの仕事に就かされて最初はスギモリが1歩、歩く度になにか仕事を見落としてないかとドキドキしたものですよ。最初のミスにはうちの組織は寛容なのです。時間がたつごとにシビアになっていきましたが、まあ慣れですよ。おほほほほ！」

事務次長並みの明るさで返されてしまった。

おほほほほ！って。・・・あの人の下で働いてたら私もいつかああいう風になるんだろうな、という覚悟を決めておきながら、嫌いではないなとも思ってしまう。

「アルワールさんは国連に入ってからもう長いんですか？」

「そーねえ。もう10年になるわね。私、最初は「開発のための科学技術委員会」に配属されたの。この国とこの技術は相性がいいとか、あの地方にはまだこの技術は早い、あの地方のためにならないとかそんなことばかりやっていたのに、いきなり政治局の、しかも秘書になんかされてしまっただけ」

どうやらサプライズがここの持ち味らしい。「開発のための科学技術委員会」は国連の中でも超がつくほど人気の部門だ。それでも

政治局の方が権限が強いわけだが、政治局は仕事がややこしい割に面白くないと一番人気がない。

「それなら、ここに来てからはそんなにたっていないんですか」

「まだ半年。もうスギモリさんに振り回されっぱなし。あなたも早くここに慣れないとだめよ。これ私の番号だから何かわからないことがあれば連絡なさい。さて、ついたわ。ここ事務次長補室よ」

「あ、これわたしの番号です。アルワールさんも半年だからまだわからなことがあるでしょう？わたし1年間、非正規でも現場で働いてたんです。わたしのわかりそうなことならいつでも聞いてください」

「あら、頼もしいことね。ありがと。それと・・・」

事務次長補室の前なのでリコリネに聞こえてしまわないようにアルワールは小声にする。

「噂でも聞いていると思うけどリコリネさんはとても仕事に対して真直ぐな人だからあまり冗談とかは言えないわよ」

「はい、わたしも就任早々クビで辞めたくはないのですから！」

フォーチュンにとって、しばらくはないであろう笑顔をアルワールと交わした。アルワールさんは少し大きい声に戻して

「それではわたしは失礼させていただきます」

と言ったあと再び小さな声で「がんばれよ！」と声援を残し、ア



ルワールは事務次長室へと戻っていった。

## リコリネ・ロゼの部屋

リコリネ・ロゼ。

彼女はここ循環社会国レジキントのパジク地方の出身だ。両親はリコリネが生まれてまもなく亡くなり、すぐにロゼという秘密結社に預けられた。

ロゼはいろんな評判があるが大体良いもので秀逸な人材を輩出してきたことでも有名である。そこで彼女は幼くして驚くべき才能を世に見せつけた。

国連が、他の全ての国連組織から独立したひとつの機関を経済活動に参加させることで、星に与える影響についての論文を彼女は弱冠12才でまとめあげ、翌年に正式採用された。言うなれば 現在の国連の姿があるのは彼女がいたおかげなのだ。

だが今、ロゼはこれからも組織を存続させるかどうか意見が分かれている。組織の頂点に立つイレブンディメンションの資格をもてる人物が出てこないことと、時代の流れの中で組織がこれまで通り、世により良いものを出していけるのかどうか争点になっているようだ。

リコリネは只一人だけテンディメンションの資格を持っている。弱冠24歳ではあるが、ロゼの前途は彼女が国連から戻ってくるか否かにかかっているといっても過言ではないらしい。彼女が2つの巨大な組織に大きな影響力をもっていることだけは間違いのないことだ。

現在でもリコリネの国連での仕事の精度は非常に高いものを維持している。目的と狙いが寸分狂わず実行され、「副作用」とされる部分が0に等しい。ただ普段は、地道で目立たない仕事をするこ

が圧倒的に多く、他の職員は「ネクラ」などというあだ名をつけている。

フォーチュンがリコリネ事務次長補について知っているのはこれくらいだが、やはり迫力がある。

（ロゼの唯一のテンディメンションにわたしはこれから仕事を何もわからない状態で聞こうとしているのか・もうちょっとアルワールさんから情報をもらっておいたほうがよかったような・・タケニアについての知識でも把握しとかなければ話にならないんじゃないのかな・・・）

など尻込みしはじめていたのだが、部屋の前でアルワールとのやりとりが部屋にいるリコリネ事務次長補にも聞こえているはずなので、いまさるところに行く訳に行かない。意を決したフォーチュンは

「失礼します！」

と少し勢い余った声で部屋へ入っていった。ドアを開けた直後から張りつめた圧力のようなものをフォーチュンは感じとる。事務次長室とは明らかに空気が違う。何か緻密につくられた空間に異物が紛れ込んだ錯覚に陥ってしまう。もちろん異物はフォーチュン自身だ。

「フォーチュン・ブリッジマスター。親にはいい名前をつけてもらったな。仕事もなかなか出来ると聞いている。はじめまして、私がリコリネ・ロゼだ」

リコリネ事務次長補が話しはじめた瞬間、フォーチュンは部屋全体が軽くなったような気がした。緻密な空間はなめらかに消えていき、目の前には1歳年上の普通の女性がいるだけだ。

（部屋に入った瞬間とはまったく違う。なんだか普通にしゃべってしまいそうな雰囲気・・・）

フォーチュンは一線を引くべきなのか、この雰囲気のまま自然にしゃべろうか迷ったがその真ん中の言葉を選んだ。

「今回タケニア担当ロードをすることになりました。よろしく願います。実は事務次長補。大変申しにくいのですが、私はタケニアに関する何はわかりません。概要がわかる資料など見せていただけるとありがたいのですが」

あんな空間を作ってしまう人と裸一貫で打ち合わせできる度胸はフォーチュンにはない。ただそういった不安からすぐに仕事の話へ移ることを嫌ったりリコリネはフォーチュンのパジクでの話を持ち出した。

「まあ焦るな。お前の事情はスギモリ事務次長から聞いている。さてパジクではうちのとずいぶんやりあったそうだな」

リコリネとフォーチュンの元ロードであったヒトコラは前回のタケニアでの仕事のあとに一緒になった。つまり新婚ホヤホヤだ。

局内では「リコリネが何故ヒトコラのような奴と」と騒然となっているようだが、その後のリコリネには生き生きとした表情がよく出るようになったらしい。ヒトコラも偏屈者、何を考えてるかかわからないなどといった評判ながらも部下の育成には群を抜いて秀でたものがある。それにもうひとつ、リコリネを輝かせる何かを持っているのだろう。

しかしフォーチュンはそういった事を知っているにも関わらず、ヒトコラへの不満をその妻へとぶつけた。

「あの方の専門分野に関しての仕事は感心させられますが、少し自分の守備範囲をはずれたことに関してはお粗末としかいいようがありません」

「・・・そうなんだよな。こっちとしても危なっかしくて使うときはいつもヒヤヒヤだ。その分、アルデのようなしつかり者が常にフォローに回るからそういう者が育つ。困ったカラクリだが、あれは結果を出すからな」

「下としては仕事が終わってから、はじめて生きかえった心地にさせられますよ。一歩間違えたら收拾つかない事態になることがはっきりとわかりますので」

「結果的に全員がひとつにはなれるのだが、あのやり方はなんとかしてほしいものだな」

「本人の予定ではなくちょっとした配慮不足からドタバタが起こすので憎みきれないのがまた腹ただしいですね。その後、お詫びとばかりに全精力を使って事態を收拾し、予想していたよりも良い結果を残すものですからパジクの人もあきれ返って笑ってましたよ。まあ嬉しそうでしたけどね」

「あの天然男はどうすればいいのか本当にわからなくなる。ほっといていいのか、直すにしてもどう直すべきなのか」

だがりコリネがロゼのテンディメンションの資格を取得できたのもヒトコラと一緒にだった後だと聞いている。ヒトコラの持ってい

るなにかがテンディメンションに通じるものがあるのか？とも一瞬頭をよぎったがドタバタに巻き込まれた怒りが先行し、そんなわけないと強く否定する。それよりも一番不思議に思っていた質問をした。

「・・・どうしてあの人と一緒になろうと思ったんですか？」

## フォーチュンの選択

「さてな。・・ただ、深刻な問題があつて私やみんなが本当に手の打ちようがなくなつて下を向いた時に、なぜかあれは元気になるんだ。それからなにやらおかしい事を始めだして、どうしようもできない問題をもしかするとできるかという所までもつていき、最後はなんなく解決してしまう。・その代わり普通のこと一切できないけどな。・・笑つてしまうだろ。自分の部屋も片付けられない男が国連やロゼさえもさじを投げる問題を解決するのだからな」

あの人にそんな立派な事をできるのかしら？といつまでも疑問の顔をしていたフォーチュンに対し、リコリネは話を本題に戻す事にした。

「さてとタケニアに関して詳しくはヒトコラとアルデから聞くといい。それよりも今回の仕事はいわば例外だ。さらにヒトコラやアルデをロードにできない事情があつてな」

「事情・・・？」

「・・・」

聞き直した後に、リコリネが話に詰まったのでフォーチュンも一抹の不安を覚える。会話を途中で終わらせるような人ではない。リコリネは、ばつが悪い感じを隠さずに話を再開させた。

「・・・実は今回の仕事は政治局にとつても初の試みなのだ。最初で最後になるかもしれないがな。わたしはあまり納得していない。上手い方法であることはわかっていても、お前やタケニアの人にもリ

スクが高すぎることで、このようなことは本来やってはいけないものだと思っているからだ」

（いったい政治局はわたしに何をさせるつもりなの？というかなぜわたしがやらなければならぬの？・・・いいお給料もらえるかしら！）

ロードというだけで役職手当がもらえるが、仕事自体にもそれなりの手当がつく予感がする。買ったかった水素エンジン車HR530などが頭に浮かぶが、やはり自律気球に最新のバージョンアップだ。素材が軽くなり柔軟性が飛躍的に向上したため通常の30m級の自律気球なら少し大きめのカバンに収納することができるようになる。それになんといっても上手くいけば人とも会話できる可能性があるというのは、フォーチュンにとって夢のような話だ。自律気球は150年以上前にはよく人とも話していたが、時代や流行の移り変わりにより人との会話に対応できなくなってきたのか、自律気球同士では会話をしても人と話すことはない。それでもフォーチュンはミグと名前をつけた自律気球と2年間を過ごす中で、いつも話しかけている。

（ミグがしゃべれるようになったらどんな話をしよう？一緒に旅行へも行きたいし、ミグの友達とも遊びたいし、ミグと恋話もしたい！）

まだもらってもいない大金で想像を膨らませるフォーチュンだったが、そんなことまで察知してかしないでカリコリネはコホンと咳払いをした。

「とにかくこれはお前の一生にあまりにも大きく関わってしまう仕事になる。だから降りてもいい。もちろん降りたとしても政治局の



採用がなくなるわけではない。ロードではないが違う仕事は用意してある。そういった事を踏まえた上で今回の仕事を聞いてほしい」

仕事が一生涯に関わることは他の仕事でも同じだろうと思うが、「あまりにも大きく」という所がやはり気になる。そして「本来このようなことをしてはならない」もあまり綺麗ではない仕事になるのだろうということもなんとなく想像がついた。しかし詳細を聞かないことには、なにも始まらない。フォーチュンはそろそろ前置きは終わっただろうと思い

「いろいろな事情があることはわかりました。では今回の仕事の内容をお願いします」

と恐らく高収入であろうという所もフォーチュンを揺れ動かしており、前向きな姿勢で話をリードした。

「・・・わかった。それでは今回の仕事の詳細を説明する」

リコリネの周りの空間が再び規則正しく緻密に形成されていく。フォーチュンがかかるうじてゆとりを持つ事ができたのは最初に部屋に入ったときに味わったものより少し温かみが残った空間だったからであろう。リコリネは端正な顔の少しだけまつまりきつてない部分を残しながらも話を続けた。

「政治局の主な仕事はお前もパジクで働いたからわかるだろうが、現地の現状を現地の望む姿に結びつけることで、それ以外も以上もしない決まりだ。だが前回、これは異例なことだったのだが、私たちのチームはタケニア地方で政治局主導のシステムを作った。これは現地の望む姿に我々、政治局が一枚噛んでしまうことにつながる。お前にはまだわからないかもしれないが、そこで手をだし、さらに

政治局が入ると、結局は地方自治の本来の意味や力を失うことになってしまう。そういうこともあり政治局が2度入ることがないよう、システムを作っている時に手はずも整え、後々、政治局が不要になるよう、タケニアの人の手で全て調整できるようにしてから引き上げた」

現地の望む姿に加担すれば、現地が生活していく上で起こってくる小さな問題をその都度、政治局の見解を聞かなければいけない事態になり、やがては政治局のためのタケニアになってしまう可能性が出てきてしまう。リコリネはその小さな問題を現地のタケニアの人だけで全て対処できるまでにしてきたのだ。しかし、フォーチュンにはどんな事があって物事の根本から覆すようなことをしたのかまったく理由がわからない。この真空地帯の存在に、たまらずフォーチュンは

「お話はわかりますが何故、そのような事をしたのですか？」

と話の途中とはわかっていても口を挟む。リコリネは少し間をとったあと、おぼつかない部分を微かに残しながらも覚悟が決めた真剣な顔に変化した。

（・・・あららら。これは私の手におえる範囲というかレベルを遥かに超えそうだぞ。出来ないことはやるな・・・かな）

その迫力に、お金の勢いは買おうとしていた車に近いのスピードで頭から消え去り、フォーチュンは早くも見切りをつけはじめるといふ情けなさだったが、代わりにこれに対処できる人がいるのかどうかという疑問が浮かんでくる。リコリネを見つめながらがら代役の難しさを考え、とりあえず話を聞き続けることにする。

## タケニアの事情

「全ては自律気球からだ。200年前、自律気球は世界の至るところへ行くようになったが、事故回避のプログラムを織り込んでいくうちにプログラムのメインルーチンに無理が出始め、世界中のプログラマーの頭を悩ませていた。そこで新しく開発されたのが人格プログラム。自律気球自身にあらゆる条件下で「思考」させ、相当数のプログラムの競合を回避することに成功した。その人格プログラムが・・・これは機密事項なのだが・・・2年前、世界中の自律気球がタケニアの人の人格を見て学習していることが確認された」

フォーチュンは驚きの顔を隠せない。100億もある自律気球がたったひとつの地方の人々のみを見て学習している。しかもその地方はいわば工業地方であり、100億の人格を創りだす能力があるとは想像しがたい。この事実によりタケニアの人の負担は想像を絶するになったことは容易に想像できる。

「これを受けて、タケニアからの要請もあり直ちに政治局が例外的特別介入を行い、事態は一応、収拾された。だが3年前に国連が原案をつくりはじめていた三社会交流制度に対応できるかどうかまでは保証できないものだった。三社会交流制度ではタケニアでは1年目はタケニアだけの経済活動、2年目にレミナ循環社会地方と10万人規模の相互交流しての経済活動、3年目にジャフェギユ共産社会地方と5万人規模、4年目は他の地方同様に基本生活以外の経済活動を全て停止し、星の環境保全に取り組む予定で組まれたが、最近の調査で3年目のジャフェギユとタケニアの交流に相当な無理がくることがわかった。ジャフェギユでは共産社会で流通しているアンダーグローバルマネーを見事に使いこなしている。だが自律気球を抱えたタケニアの人には対応できない公算が高いのだ」

ジャフェギユは共産社会形体をとっており、グローバルアンダーマナーが使われている地方だ。このお金は世界で流通しているお金に変えることができないことからアンチマナーといわれているのだが、資本社会で売り物にならなかった商品や、余る見込みのある食料など、資本社会で価値がつかなくなったものを買うことができる唯一のお金である。だが扱い方もまた特殊で、グローバルアンダーマナーの厳密な獲得方法はなく人々の相対評価によって支給が決定され、使うときもただ持っているだけでは使えず、地方により決められた資格を持たなければ物を買う事が出来ず、さらに買うものも制限がかかっており、その制限も相対評価により決定される。

「今のタケニアは個人、企業、地方政府や国の自律気球の管理を、直接的には約3億機を請け負っている。大半は砂漠地帯で待機しているのだが、タケニアも緑が増え、長く自律気球が留っていると恒星光が常に遮られ生態系への影響が出てしまったため、近年あまり多くの自律気球を駐留させることはできなくなってきた。それでもタケニアの自律気球の管理技術は他の地方を圧倒しているためにメンテナンス受注はパンク状態だ。ジャフェギユとの交流を成功させるためには、まずは自律気球の良き模範となることを課せられたタケニアの人の圧倒的な負担を減らそうと考えた。そこで私は自律気球と人との会話機能を復元させてメンテナンスを円滑にすべくバージョナップを指示した。そして2週間前の国連で三社会交流制度が公式に提案されの日と同じ日に、第172バージョナップを行われたのだが、会話機能は戻らず、その直後タケニア以外で管理している自律気球が次々と落ちだした」

「・・・タケニア以外で管理している自律気球だったのですか・・・？今の所の情報だけではタケニアでの第172バージョナップが発端と思われるのに・・・自律気球は全ての機がネットワークで繋

がっているのですその関係なのでしょうか？」

「自律気球に関しては国際民間航空機関が動いているのでこちらからは何もする必要はない」

フォーチュンはここで引っかかりを覚える。聞いている話からは全て自律気球から始まっている問題であり、政治局としても自律気球を避けては通れない予感がする。だがリコリネがいいと言っているのでこの場でそれは追求せず、他の疑問点を聞いた。

「はつきりとは言えませんが、事務次長補がやったことは本来、持続可能開発委員会の仕事ではないのですか？あとそれと、タケニアとジャフェギユの交流期をうまくいかせるためにはタケニア同様、ジャフェギユやレミアにも政治局の人間を送らなければいけないのではないですか？」

「確かにこうした地方政府単独では解決できない問題を抱えている地方が多いため、経済社会理事会の下に持続可能開発委員会がある。だが最近の持続可能開発委員会の作り出したものは一見立派だが、どれも機能もするかどうかも怪しく、続くにしても1年ももたないものばかりでな。うちの仕事として事務総長が決断した。それとジャフェギユやレミアに人を送る予定はない。あの2つの地方はたとえ交流期であろうと総体として何も変えることはしない。そして総体として変わらない所がいいところでもある。だがタケニアは自律気球を抱えているのでそういうわけにはいかないのだ。レミアが自律潜水艦を実用化したらまた話は別になるだろうが、それはまだ先の話だ」

「・・・ジャフェギユ、レミアに関してはわかりました。しかし、またこの局主導のシステムを作ろうとしているのですか？」

「いずれ持続可能開発委員会を政治局に組み込む算段もあるのだろう。これ話自体、わたしはおかしいと思う。おかしいというよりも不可能だな。・・そこらへんは上の人間に任せるとして、自律気球の墜落は第172バージョンアップがきっかけで起こったと思われるが、政治局主導のシステムも自律気球全体に悪影響を与えた可能性もあるだろう。なんとしても今の事態を一刻も脱したい・・・そこでだ」

リコリネはフォーチュンの目の奥をじーっと見つめた。フォーチュンもそれをまっすぐに見つめ返す。

「ヒトコラやアルデがさらに指揮をとれば政治局の色がタケニアに強く出て間接的に自律気球にさらなる悪影響を与えかねない。・・そこでまだ政治局に染まりきっていないお前がチームを率いて無理がきている現場に行き、実際にその中で働いて問題箇所をひとつひとつ直し、連携をとりながらジャフェギユとの交流期でも機能するシステムを作ってきてほしい」

「は??」

## 選定理由

「まず、なぜお前がロードに選ばれたのかを説明しておこう。お前の感性は国連にも近くタケニアにも通じるが、まったく異色のものも持っている。つまり人とは違う原動力がある。お前は3つの社会全ての地方に住んだ経験があり、趣向は文化的なものから体を使いこなすものまで幅広く、自分と他人を存分に喜ばせるコツも心得ている。仕事は国連の職につくまでの7年を様々なビジネスをして、資産もそれなりにつくり通常、老後のために買う自律気球をわずか21歳で買ってみせた。さらにパジクでの働きでヒトコラによるお前の評価は、文句こそ言うがとにかく仕事を確実にこなし、さらに仕事のキメ細かさが随所で良い効果を引き出しているというものだった。ヒトコラが言うのだから間違いないだろう」

（調べられているわね・・・でも喧嘩した記憶しか残ってないヒトコラさんがそんな風に言ってくれていたのか。受ける、受けないは別にして菓子折りでも渡しとくかな）

フォーチュンがこんなことを思っている間にもリコリネの話は続く。

「我々がタケニアの人にこれが出来ると思っている出来ないこともある。お前にはチームをあらゆる現場で働かせ、指揮を執る過程で知り得る現場の息使いを見て、そこから現在のタケニアの問題を解決し、ジャフェギユとの交流期にも耐えうる柔軟なシステムを作ってきてほしい。もちろん部下が5人で足りないことはわかっている。お前を驚かせないように少なく言っておいたただけだ。5人はそれぞれがロード級でそれぞれに5人の優秀な部下、さらに下に5人ずつ部下

がついている。全員が優秀だからいくらでも下を率いることもできる。人が足りなければいつでも私に言えばいい。現在お前は155人のロードだ」

なんの話もなしにこんな用意までされていては尻込みせざるをえない。恐る恐るフォーチュンは弱気な言葉を吐く。

「・・・あのもう拒否することはできないのでしょうか？」

（なんかもう後に引けない感じ。っていうより私の代わりがいるのかしら。このリコリネ事務次長補の仕事の仕損じをカバーできる人なんて。・・・国連の職員とタケニアの人は似ている部分は多いけど、根底の部分で毛色がはつきり違うから、一時しのぎはつくれても、それ相応の寿命をもったシステム構築は無理だ。だからといって私に出来るのかな）

リコリネも少し考えているらしく、すぐには答えが返ってこないで、フォーチュンは間を空けずにもうひとつ聞いておく。

「それと事務次長補、私の代わり、つまりホカホカの優秀な新入職員はいるのでしょうか？」

これにリコリネは少し自信のようなものを取り戻した様子で口を開きはじめる。

「お前の代わりはいる。2人だがな。そこら辺は安心しろ。お前がシステムの構築が失敗した時もすぐに対応できるよう、その2人は常に最新の情報を与えておく。・・・これは言わない方がいいのかもしれないが、その2人はお前の部下155人の中にいれている。それが誰かまでは今は黙っておく。・・・いずれすぐわかることだから詮索するなよ」



終止リコリネはお前で決まりだ、という姿勢を崩さず話してく  
るので買いかぶり過ぎでは？という思いがふつふつと湧いてくる。  
だが長く話していてもベストアンサーが出てくるとは思えない。未  
開の分野に足を踏み入れるのだから予測できないところが多分に含  
まれているためだ。フォーチュンはこの仕事を受け入れる動機をつ  
くり始める。国連の仕事ができる、リコリネと仕事ができる、報酬  
が恐らく多い・・・最後に再び「ええい！」と 覚悟を決めた。

「わかりました。やらせていただきます。でも、なぜ3人の中でわ  
たしが真っ先に選ばれたのですか？パジクでもそこまで幅広い仕事  
をこなしたわけではなく、それほどの結果を残したとも思えません  
なにがその3人と私に違いがあつたのですか？」

「3人の中からお前を選んだ理由は、お前が応募したパジクでの仕  
事で偶然ヒトコラとアルデのいるチームに加わった。前回のタケニ  
アの仕事を担当した2人をいれることが最優先で決まったので自動  
的にヒトコラ達と親交のできているお前になった。・・・本当にそれ  
だけだからな」

しばらく2人で作り笑いをしたあと、事態が急を要する理由か  
ら準備に3日だけもらい4日後には155人を率いてタケニアに向  
かうことを決め、ヒトコラとアルデが会議室で待っていることを伝  
えられて「いつでも連絡してこい」と連絡先だけをもらい、事務次  
長補室を出た。

頭の中では今ある情報だけで一応の仕事の完成形をちょっとでも  
描こうと努力しているのだが、廊下を歩き始めてからフォーチュン  
はやはり一言だけ、ポツンと言った。

「・・・無茶苦茶だよ・・・」

## 憂慮

会議室へ向かっていると、タケニアに関する資料を持ったアルワールが歩いてきた。予想よりも早く話が終わったためアルワールが会議室に着く前に鉢合わせになったのだろう。

「お疲れさま、どうだった？リコリネ事務次長補は？」

「いえ・・・立派な方なのだろうと思いますが、仕事の内容が・・・」

「あ、そうそう！あと渡し忘れていたけど、これが正式な辞令ね」

タケニアを蹴るかどうかで恐らく2種類の辞令書が用意されていたのだろう。だがもうごちゃごちゃ考えたくなかったのもあり、フオーチュンは一目散に給料の額を見た。今はその数字のみが彼女を突き動かすことができる。歩きながら考えてみると、仕事には容易に手がつけられない割に、それに見合った大きなお金がもらえないような気がして、それも彼女を落ち込ませる原因となっていたのだが、初任給自体も悪くなければ特別手当がこっそりついていた。

（特別手当が1000万ウノカに毎月、ロード手当が200万ウノカ。国連ってお金持ってるわね！こういう仕事だし貯金もあるから部下をねぎらう分は残しとくとして、残りはパーと使っちゃおうか！）

にやつきはじめてた若いロードにアルワールは不安を覚え、少し厳しい口調で戒める。

「あなたの仕事ぶりでタケニアの多くの人の人生が動かされるわ。」

将来に渡ってね。国連の存在意義も問われることにもなれば、さらに他の地方にも甚大な影響がでる。脅かすつもりはないけどあなたの背負っているもの、人にとってさほど小さくない部分なの。欠けることが許されない部分の」

タケニアがうまくいけば、今後違う地方で予測不能の問題があったとしても国連に大きな信頼が残ることになるのだろう。単純な肥大化ではなく、星と呼応しあう社会を作り出すため、提案された三社会交流制度。星は絶え間なく片寄った自らの組成変化を要求され続け、それに対し有効に直す試みが一度して、なされてこなかったことはフォーチュンの胸にも残っている。しかしフォーチュンは小難しいことをずっと考えているのも嫌いで、こう言い放つ開き直りも持っていた。

「結局、現状で無理がきてる所を直せばいい話じゃないですか。・  
・まあ私は自分の人生をまともにしようとは思っていませんが、自分の仕事だけはどんなことをしても至高のものに育てあげると、この星に誓いをたてています。今回の件が例外になることはありませんよ」

アルワールは表情を和らげた後、今度は意気込みすぎた新ロードを諭してこの話を終わりにした。

「どんな人でも限界があるわ。リコリネ事務次長補も例外ではなくね。今回の仕事はあなたの力ではどうにもならないだろうと思われる箇所が少なくないのは事実よ。例え、ミス犯したとしてしまっただとしても、そのミスは自分で全て解決する必要が今回はないことを忘れないで。あなたみたいな人は諦めることができないでしょうけど、今回は奇麗に諦めて新しい才能に任せなさい」

## アルデとヒトコラ

フォーチュンはアルワールに155人全てが入れるホールを手配してもらい、タケニアへ行くまでの全ての打ち合わせをそこで行うことにした。全員と顔を付き合わせてみないことには出来ることと出来ないことの区別がつかない。それと、これまでに政治局が行ってきた行動、タケニアの歴史、タケニア地方政府の将来の希望方針、パートナーのジャフェギ共産社会地方、レミナ循環社会地方など多岐にわたる資料を頼んだ。情報が揃わなければ思わぬ所でつまづいてしまう。

「アルワールさん、あとは・・・」

「まあ待ちなさい。まずはこの二人の話を聞いてから」

とアルワールは会議室のドアを開けた。

「おう、このやんちゃ娘が！いきなりロードになったからって好き勝手させないからな！」

「フォーチュン、また一緒に仕事ができ嬉しいわ。頑張りましょうね」

前回の仕事でロードを勤めたヒトコラはニヤニヤ顔で、先輩のアルデは落ち着きを保った顔で待っていた。

「どーも、ヒトコラさん。その節はいろいろご迷惑おかけしました。わたしも反省しているところはあるんですからね！アルデさん、今回もよろしく願います」

「まったく、お前の事は良く言つといたが・・政治局もだんだん無謀なことをするようになってきたな。言つとくがお前の好きなことができるようにするための「政治局」ではないのだからな！」

「フォーチュンはそんなことをしないですよ。フォーチュンの仕事はみんなも目を見張るものだったもの。あなたには物事の全体を、本当に漏れの少ない目線で見て、その目線を実際に活かすことができる。他の人にはできないことよ」

ムチの後に甘い飴をもらった所で早速、本題を切り出した。3日のうちにやっておかなければいけないことは星の数ほどある。もちろん二人もそれは承知しているのでタケニアに関して要点をついた話をアルデが始めた。

「タケニア地方は面積70000平方キロメートルにたった人口200万人しかいないこと、そして中心部以外に150万人の人が散開していること、さらに国の大半が砂漠化した状態だったことから、昔は経済、特に流通面では大変な苦労をしてきたわ。その3つの問題に対して200年前に生まれたのが自律気球。自律気球のことはあなたも持っているから詳しく知ってるわね？」

自律気球はそれまで危険とされてきた水素気球を、球皮に絶対の耐久性と絶縁性を持つピセルファイバーと1?で500Whの電力貯蔵を持つキャパシタファイバーで包むことで出来ている。もちろん「人格プログラム」による無人での大量輸送や、雲の上での恒星光発電ができ、さらに気象状態や電力を必要とする施設や住宅、自動車の位置を網羅することができて、いまや電力供給の70%を自律気球が担っている。いまでは100億を超える自律気球が雲の上や砂漠地帯、海洋波力発電スポット、地熱発電スポット、風力発電

スポットなどでも大量充電をおこない、世界各地へと飛んでいく。砂漠に土を運ぶことで緑化に貢献し、また群れをなして雲の代わりとなり恒星光を防ぎ、過剰な温暖化の防止もする優れようだ。

「タケニア地方では9割以上の人が自律気球の生産、メンテナンス事業を行っている。そして自律気球はなにかあれば大事故や多くの人の不安を生み出すものとなりかねないため厳重な管理がされてるわ。でも、今回の多重墜落事故の余波でその体制に無理が生じ始めた。生産に関しては何も問題はない。新しいものを造る事は修復不可の自律気球が出たときくらいだしね。問題はメンテナンス事業の方。今回の墜落事故原因がまだはつきりとわからないことから有能な技術者が各現地に派遣され、さらに正式決定された来年から三社会交流制度の準備に力をとられた今、タケニアはとてつもない負荷を強いられるの」

タケニアが他の地域に比べ自律気球の管理に優れているのは、タケニアの人が自律気球をただの機械としては見ておらず、新しい命を宿しているという認識で友人と同じように接しようとする姿勢からきている。だが、このことはタケニアを善く律している所もあり、他方では、このような状況下に実に膨大な不都合を生み出してしまふ。アルデがここまで説明してくれたところでヒトコラが補足をする。

「リコリネは、2年前の自律気球の問題を受けて新しい地方自治、さらには三社会交流への対応にまで取組まなければいけない状況だった。そこで新しく交流期間の準備をする過程で学ぶことを、これからの地方自治、これからのタケニアに反映させる手法をとった。だが、その構想段階からジャフェギ共産社会国との交流には既に無理がきていた」

共産社会圏で使われているグローバルアンダーマナーは評判こそ  
いまいちだが、実によく出来たお金で、世界で必ず発生する余剰を  
あれほど効果的に使えた例は過去の歴史を振り返っても少ない。そ  
れを使いこなすことで世界のバランスを保つという点はとても優れ  
ている。それをジャフェギユをはじめ共産社会の人は楽しんで使っ  
てくれているのだから学ぶことも多い。

「そこでジャフェギユの生活をタケニアの人に理解してもらい柔軟  
な思考を持つってもらうことで交流期間を成功させるという方針が決  
まり、さらにタケニアの人の負担をとるためバージョンアップによ  
ってメンテナンス効率も飛躍的にあがる会話機能の復元を提案して  
2年前の仕事を終えた。だが、自律気球が落ちだしたことでこの方  
針が揺らぎ始めた」

## 星の循環

ここまでヒトコラが話したところで、コホンと咳払いを自分の思いを打ち明けた。

「だがタケニアの人もやはりジャフェギユでは大変だろうな。俺もジャフェギユでは正直、やっていけない。もともとは「金を持っていないことが悪い世の中は終わった」という国際通貨基金の認識から生まれたグローバルアンダーマネーだが、これを使いこなす過程ではさまざまは悲劇が生まれたことも事実だ」

確かにジャフェギユの人は人間の生活さえよくなれば良しとする傾向がある。大きすぎて変わりづらいものに対しての感覚がまったく欠如してしまい、星の生態に関して張り巡らさねばならない神経を人間に使いすぎてしまっている。国際連合の職員は人間も星にいる生物のうちのひとつという見方で、命を形造っていない物質であっても大切な星の一部と考えている。安易な人間の生活向上は星のバランスの不安定化へとつながるため、星のバランスを第一に考え、その上で生活を楽しんでほしいと願う国連に対しジャフェギユ地方に限らずバランスを1割程度考慮したくらいで星のことは十分に考えてると言い張る所が最近多くなってきた。

循環社会地方でもこのことは常に議題の中心になっておりバランスを失ってしまった星のサイクルを戻すため、ありとあらゆる努力が行われているが、焼け石に水の状態に陥っていた。再三、資本、共産社会地方には警告を行っていたが、返事はいつも星への汚染物質を5年後今より10%減らす、星の維持活動をいまより5%活発にするなどといったもので次から次へと乱していくバランスに対し、対策は乱れを10〜20%程減らすというものだけであり、なんの



解決の糸口をも見出せなかった。循環主義を貫くミセール人が、極度の砂漠化により他の社会の人々に見切りをつけた所に住み、それに賛同する人々と共に砂漠の緑化を行ってきた。自らの住む土地を変え、生活スタイルを変え、自分たちを常に犠牲にしてさらに自律気球の力を借りることで星のバランスを整えてきたのだ。だが

「何故、好き勝手をしている者達に振り回されなければならないのだ？」

「こちらからなんらかの行動を起こしても良い時期なのではないか？」

という意見が循環社会地方のあちこちから噴出し、フォーチュンもこれらの問題はここパジク地方での人々の生活を見てそのことはひしひしと感じていた。

「わたしも今ではジャフェギユには住めませんね。確かに一見、星との共生に歩み寄っているようには見えても、その裏でパジクの人たちがあれだけの苦勞と惨い生活を強いられているのですから・・タケニアの人も星、そして人の命を預かる自律気球の管理という仕事を通して心に根付いたものがあるでしょうからジャフェギユでの生活に無理があるでしょうね。だからといって交流期をなくしタケニアにこのままの状態を続けさせていいものではないし、ジャフェギユの人には意識の奥深い所に星の声を届かせなければいけない・・」

ヒトコラはやはりこいつとは話が早いといわんばかりの顔をしたあと、本質の部分を語りだす。

「世界が4年に1度の交流という形体を選んだのはまさにそこだ。互いに足りないものを補いつつも自らの魂を追い求める。だがそれは悪魔で理想であって現実にはあらゆる場面で障害がある。それは頭の中で考えたり、机の上でいくら話し合ってもどうにもできない

ことだ。パジクでのお前の仕事を見たとき、この問題を解決できうる、人と自分なのか自分と人なのかはわからないがお互いを成長させる『なにか』を持つているような気がした。今回の2つの問題を解決に結びつける一番近い位置にいるのがお前だ。・・・だが今回の件は失敗したら最低でも3つの地方を地獄へ突き落とすことになる。忘れるなよ」

## フォーチュンの家

ヒトコラの話が一段落した後、フォーチュンはアルデがすぐに用意してくれた山のような資料に目を通し始める。すぐ隣に専門家が2人いることもあり、わずか3時間たらずですべての情報を把握してみせた所で、会議室に新たに3人が入ってきた。アルデはその3人と少し話をした後

「フォーチュン、この3人もあなたのフラッグ（副ロード）として働いてくれるわ。キナシクとナダン、ペクト。キナシクとナダンは古株だけどペクトは2年前から非正規職員として働いて今年から正式に働いてもらうことになったの。きちんと面倒みてあげてね」

と笑いながら紹介してくれた。キナシクとナダンは政治局の中でも有名である。二人とも50代の後半だがキナシクは柔軟な考えと厳格で筋の通った行動で定評がある女政治局員で、ナダンは豪胆、頑固など言われるが今までの実績は男性の政治局員の中で群を抜く存在だ。だがペクトの噂を聞いた事がない。見た感じ年は同じくらいなのでどんな男なのかと黙っていると思うと向こうの方から話しかけてきた。

「お前が新米ロードか。リコリネもついに焼きがまわったようだな。お前がどれほどの事をできるかわからない見込みがなければ俺がロードに代わる。最初はおとなしくしててやるから早くビジョンを示すんだな」

これにはフォーチュンもいろんな成り行きに流されたものの、最後は自ら進んでロードになったのだから黙ってる訳に行かない。

「はじめまして、新米フラッグさん。わたしにもあなたがどんな人なのかわからないけど今回の仕事につかえそうもない人間に何かを任せる気はないわ。早くつかえそうな能力を見せてね。何もなければ、すぐにでも私のチームから出て他の仕事をしてもらうので、そのつもりで」

早速、険悪なムードが生まれたところをキナシクが厳しく諫める。

「あなたたちは今回の仕事がちゃんとわかっているの？非戦争社会への切り札となるべく三社会交流制度の基礎を作り上げる大事な時なのよ。これから少しでも軽はずみな言動があるようなら事務次長にロードとフラッグの交代を要請するからそのつもりで仕事をしなさい！」

ナダンは下を向いて深いため息をしている。ヒトコラとアルデも顔に不安の色を隠しきれていなかったが、ヒトコラはぐっとこらえてフォーチュンに説明する。

「いいか。今回の仕事は前例のないことだ。だからそれぞれのスペシャリストがこのチームに揃っている。フォーチュン、ペクトはお前と同じ年でゼロのナインディメンションだ。お前の良い右腕になつてくれるだろう」

（こんな男がゼロのナインディメンション！？そりゃゼロが存続の議論をするわけだわ）

フォーチュンはこの心の言葉を胸の内におさめることに成功したものの、他の4人とはとかく本当にこの男とやっていけるのだろうかと不安に駆り立てられた。タケニアの仕事の難しさがこの男と一緒に仕事ができるのかとも通じているような気もする。ロードと

フラッグ5人がはじめて会ったわけだがこのまま3日後タケニアに行く訳にはいかない。自己紹介の時間も惜しいと思ったフォーチュンは越してきたばかりの自分の家にみんなを連れ、そこで話をすることにすることを即断した。

国連が所有している車をアルワールに借りてから、フォーチュンがハンドルを握り自宅へと向かった。

（デトレニス500、くー、やっぱ国連はお金持つてるわー。自律気球での空の旅も悪くないけどやっぱりこれじゃなくちゃね）

自然とスピードを増していく車内では

「おい、新米！スピードが出てるぞ！お前以外は死なれては困る奴らばかりなんだ。どっかにぶつかるならお前のいる方からぶつかれよ！」

と早速ペクトから文句が飛び出る。

「私が死んだらあなたが指揮をとろうとしてるんでしょう。生憎、私はタケニアの人にもジャフェギユの人にも恨みはないの。あなたの手にかかって亡くなる人と向こうの世界で一緒になって謝るはめにはなりたくないからね」

車内でも相変わらずの喧嘩ぶりにナダンはキナシクの肩をトントンと叩く。キナシクはポケットの電話に手を伸ばしていたのだが、もう少しだけこの二人を見て、そして早いうちに見切りをつけようと心の中で既に決めている。

予想よりも少しだけ早い時間にフォーチュンの自宅に着いた。少

し高さのある石造りの平屋で、同じ形で違う彫刻が施された家が20戸つながっている。中は広々とした吹き抜けがあるリビングにちよつとした図書館のように本がおいである部屋とさまざまな加工道具や材料がある工作部屋があり、一人で住むにはあまりにも大きすぎる住居だ。

「まあみなさん、真ん中のテーブルの所へどうぞ」

フォーチュンが指さした先には10人くらいで囲めそうなテーブルに座布団が敷いてある。一同は少しキョロキョロ辺りを見回しながらも腰をおろした。本棚のある部屋は近代建築からゲシニア古典、比較文化学に電磁原理学や認確率学などぎつしり詰まっているのでざつと見ただけでも10000冊は超える。どの本もやつれており、お世辞にも綺麗に本を読んでいる感じには見えない。

「お前はこれを全部読んだのか？」

ほぼ全ての分野の本が揃っていることで、ペクトも少しフォーチュンを見る目が変わったようだ。

「1つの本をマスターしてからじゃないと新しい本は買わないようにしてるの」

一同は「何者なんだ、こいつは？」という疑問で目を合わせる。それを代表してナダンが

「君はどこ生まれかね？」

と聞く。フォーチュンはナダンと初めて話すわけだが特に嘘もいふ必要もないと思い

「私はトキララという非三社会地方の生まれで、育ったのはイタリアのガイナ循環社会地方です」

と素直に答えた。ナダンはまだ疑問が解けないらしく質問を続けた。

## 凍結

「なぜ文明を受け入れていない地方からイタレナにいったのかね？  
非三社会の人がどこか他の国へ行くことは稀なことだと思うが」

ここでフォーチュンは初めて自分の過去を話した。自分が幼いころ原因不明の病気になったこと。たまたま非三社会文化の研究に來ていたイタレナの学者が、フォーチュンの病気を治すためにイタレナへ連れていき10年もの間、病気が完治するまで面倒を見てくれたこと。それからトキララの国へ帰ったが病院の中でイタレナの学者に教えてもらった学問を忘れることが出来ず、単身イタレナへと移り住み学問に励んだこと。それからいろんな国が自分の目で見たくなり自分で商売をしながら様々な国で暮らしたことなどを語った。

一通り話すと今までフォーチュンに否定的だったキナシクも興味津々に質問をしてくる。

「商売もやっていたの？」

「親はトキララでお店を開いているんです。元々商人の血を引いているので」

「トキララと他の地域では勝手が違いすぎなかったかい？」

「根本の部分は同じですよ。こちらが、お客さんが心から満足のもの納得のいく値段で用意できるか、そしてなによりサービスお客さんをどのようにして楽しませるかですね」

「ところでイタレナの学者の名前は？」



「ビンドピット・ストライカー先生です。すごく気さくで何でも知っている先生なんですよ」

「ビンドピット!？」

これには全員が凍り付く。だがフォーチュンはよくわからない。先生って結構、有名なのかな？そういえば先生の素性なんて調べようなんて思ったこともなかったなと回想してみる。大学の先生だということを知っていたが10年もの間、病院で付き添っていてくれたのに、それ以外でなにをしていたのかなどは全く知らない。

「ゼロの元イレブンディメンションじゃないか!! わずか在位3年で退いたゼロ初の女イグ（組織を司る者）だぞ!!」

これに凍り付いたのは今度はフォーチュンの方だ。どこからどこまでが運命なのかはわからないが、フォーチュンのこれからはタケニア、ジャフェギユ、国連にゼロと大きくと交わろうとしていることは確かなようだ。

とにかくフォーチュンの部屋ではみんなが凍結した状態になっている。フォーチュン以外の面々はゼロのイレブンディメンションにはあったことがあるが親しい付き合いなどしたことはない。それなのに10年もの間、生活を共にしてきたという一風、変な女が目の前にいることでどう対処していけばよいのかフォーチュンを含め、誰にもわからなくなってしまったのだ。

ヒトコラが一番早く凍結状態から戻り、場をしきりなおす。

「まあとにかくお前の素性はなんとなくわかった。実際、どこま

でこのことが出来るのかどうかはわからんが俺たち5人共、多少は信頼してサポートすることが出来るだろう。よし、仕事の話をする前に少しみんなで話さないか？おい、酒はあるか？車は国際のものに代わりに運転してもらうといい。とりあえず今日は飲んどかないか？」

これまた突然のヒトコラの提案に一同がぎょつとしたが、とりあえず凍ってしまった頭は元に戻り事態を整理しようとしても、ままならない状態だったのでヒトコラの提案に流された。

「・・・えーっと、お酒はうちにはあまりない・・・ですね。買いにいつてきます。えーっと・・・みんなは何を飲むの？」

フォーチュンも今はまともに考えて仕事の話をするのは無理だと悟り、自ら買い出しに行く事にした。

「ウイスキー！」

「・・・お茶割り・・・」

「タクラマ酒」

「お前、料理はつくれるのか？」

いっぺんにいろんな声が出始める。

「えーっと、一応作れますよ。アルデさん、手伝ってもらえます？あと新米くん！あんたは買い出しに付き合って！」

アルデも比較的早く膠着から抜け出しており

「わかった。フォーチュン、先に冷蔵庫のものから勝手に使ってつくっておくからね。あと運転、気をつけなさいよ。あまりスピードを出さないように」

とたしなめた。

## 見えない壁

せっかくのいい車も今は飛ばす気分にはなれない。イグ、イグ、イグ・・・エンジンの回転音にあわせてその言葉がグルグルと回ります。またペクトもペクトでイグと一緒にいたという目の前の妙な女に対し、違う視線に変わっていた。

（なんなんだ？この女は？イレブンディメンションが10年もの間、なぜこんな変な女の面倒を見たんだ？）

ペクトも出口が当分見えそうもない謎を抱えながら次の仕事をつくことにたいし、これは苦勞するな、と軽いあきらめを先に用意しておく。車に乗ったふたりはしばらく沈黙している。それぞれ頭から離れない事実を抱えた状態なのは、お互いなんとなくわかっている。さほど沈黙は嫌いでないペクトだったがハンドルを握るフォーチュンを考えてか、少し時間がたったところで

「ビンドピットは俺が一番評価しているイグだ」

と漏らした。フォーチュンもすぐに食いつき、こんな冷血そうな男でもあの人をそういう目で見ていたんだ、とちよつとペクトの事を見直す。

「ゼロ初の女性イグってドラマパワーあって人じゃなかった？」

「ゼロのイグになる人間で実名を名乗る者は少ない。実名を名乗れば、やっかいな問題が起こりやすい。普通の生活も送りたいだろうしな」

ここでペクトも自分でしゃべりながら、普通の生活を望んでフォーチュンをひきとったのかと少し疑問が解けたような気がした。フォーチュンもまた、それで私をひきとったのかも胸のつかえがとれはじめる。

「あなたは何故ゼロに入ったの？」

フォーチュンはペクトに関心が移った。最初の印象とは違う気がする。

「俺もリコリネと同じく産まれて、すぐにゼロに預けられた。産んだ奴がどこにいるのかもわからん。組織からは大変な問題が生じたためやむなくひきとったとだけ聞いている。まあそれを知りたいとは思わないけどな」

「なぜ？」

「人それぞれなにかの問題を抱えて生き、時には知らんほうがいいこともある。組織が詳しく教えないということは俺が知らなくてもいいということだ。組織はなかなか信用できる。俺が今まで見てきたものの中ではな」

両親を知らずに生きてきた人の気持ちとはどんなものなだろう。

自分はビンドピットがいたとはいえ幼少の10年の間、親と離れた生活は堪え難いものもあつた。だが今では自分は両親にいつでも会う事ができ、いろんな話をする事ができる。しかしペクトはそれができない。それどころか親すらも知らない。フォーチュンは自分の部下となるペクトに、自分が少しだけ持っている両親のぬくもりのようなものを自分が伝えてあげることができるのかも、と思いはじめていた。

ここレジキントという国は、今では循環社会を主とした地方で成り立っているが昔は独裁国家でほとんどの国民は農民暮らしだった。ただ国民同士はとても親密に暮らしている。店も他の国のような大型店はなく個人がひとつの商品のみを扱い、そんなお店があつまつた数多ある商店街でレジキントができているといっても過言ではない。

いつも通っている商店街につくとフォーチュンは早速ペクトを連れ酒屋へと向かう。

「こんにちは」

「あら、フォーちゃん、この前来たばかりなのにもう全部飲んじゃったの？それにまた若い男なんて連れてきちゃって」

「うん、この男にふられちゃってさ。今からまた焼酎を飲むの」

「あら、あんた！こんないい女をふるなんてどういうこと！？」

「うそうそ！今からみんなで飲むから買い出しに付き合ってもらってるだけ。ところでおばちゃん、私、正式な国連の政治局員になっちゃったよ！」

「あら、フォーちゃんすごいね！」

「で聞いてよ。いきなり管理職になっちゃったのよ」

「あらま！フォーちゃん！！それ大丈夫なの？なんか騙されてるんじゃないの？」

「私も最初はそう思ってたんだけどなんか本当みたいなの。でこの子が私の部下1号」

ずっと下を向いて黙っていたペクトだったがこの一言にはピクつときたらしく口を開く。

「安心しろ。すぐに部下1号が指揮をとることになる。それに『この子』とはなんだ。多分お前とは年が同じはずだ」

「そうよ、フォーちゃん。部下の人は大切にしてあげなきゃ。それに同じ年なのだったら上とか下なんて言わないで仲良くやらなきゃだめよ」

「いいや、おばちゃん。こういうはねつかえりには、しっかり誰がボスかってことをしらしめなきゃダメなのよ。それにね・・・本当に指揮が入れ替わることはあるの。こうしてられるのも今のうちかもしれないから！」

「国連つてやつぱり厳しいのね。でフォーちゃん！なにがほしいの？」

たかだか買い物に來ただけなのに何をベラベラしゃべらなければいけないんだ。ペクトに店で自分のことを話すなどという経験などしたことはなくイライラしっぱなしだったが、気持ちの片隅でこういうものがビンドピットの望んだものだったのかもしれないと、自分とビンドピットの間にあった未知の壁に対し、小さな発見はしていた。

「ありがとね」

「おばちゃん、しばらく会えなくなっちゃうけど電話するからね！」

「いつでもかけてきなさい。じゃ気をつけていつてらっしゃいよ」

酒屋を出たフォーチュンとペクトは食料品店へ行き、フォーチュンはまた雑談に花を咲かせ、ペクトも順調に荷物を増やしていった。

「よくあれだけしゃべれるものだな。女っていうのは口から生まれるというが」

「あら、あなたがいたから早めに切り上げたのよ。ほらヘミキシさんも後から来たでしょ。あの人も話したいことがいっぱいあったのに」

「・・・わかった。早く酒を飲みたい。車は飛ばしてもいいぞ」

見つけたばかりの新種の壁はペクトにはまだ刺激が強すぎる。ヒトコラの教えではないが困ったときは酒の力を借りたほうがよさそうだ。



## 酒

デニトレスはビュンビュンと加速したのだが、ペクトには行くときにかかった時間とさほど変なく感じ苦悩を抱えたままだ。フォーチュンに行くときは別人のようなニコニコ顔なのだが。

「ただいま！　ってもう飲んでるんですか！？　わ！！リコリネ事務次長補！！！！」

丸いテーブルにはリコリネもすっかりヒトコラの隣に座っている。ゼロの重鎮が来た事でまたしてもビンドピッドのことを思い出すが、ペクトの手には大量のお酒がある。フォーチュンも困ったら酒が身に付いたようだ。

「ついさっき来たばかりよ。飲むんだったら私も混ぜろって」

リコリネはフォーチュンの買っておいた大好きなお酒を今にも口に含みそうにしながら

「せっかくこうしてみんなが初めて集まったわけだから、参加しなくなったら仕事は放り投げてきた」

と落ち着きの中にも目の前のお酒に嬉しそうな笑みを隠しきれないようだった。ヒトコラと一緒にってからお酒を覚えたようだが相当好きになってしまったという話を聞いたことがある。

「でも、あなたたちが遅いから若い人達でどうかデートにでも出掛けたんじゃないかと思ったわ」

「わたしは職場の男に手を出さないから大丈夫ですよ」

ペクトがめずらしく何も言い返さない。少し変わったペクトの様子をヒトコラが心配し声をかけた。

「よし！ペクト！！明日のこと忘れて今日は飲み潰れるぞ！心配するな。このメンツなら１日あれば仕事の形はつくれる」

ここでやっとペクトも我にかえりはじめ、フォーチュンに対してもいい返す言葉を見つげ出す。

「・・・みんなこの妙な女のペースに流されてるな。確かに多少は使えるようだが。ナダンさんにキナシクさんもいれば、この女抜きでもなんとかできるだろう」

「まったくこの男は口が減らないわね。まあいい、いい！飲むわよ」

明日をもしっかり見えていない現実はちょっと置いておき、７人でとりあえず飲みはじめだ。みんなの笑い声の中でペクトからも小さな冗談が生まれてくる。それを見ていたリコリネは

（やはりこの女はなにかを持っているな）

と多少の不安と大きな期待をフォーチュンに託していた。

朝の６時、最後まで飲みながら口論していたフォーチュンとペクトがその場で眠りについたところでアルデも横になった。他の面々はそれぞれ自分で布団を敷き寝ている。今日は夜の７時からタケニアチームが全員集まっのミーティングがあるのだが、お酒の席で

タケニアに関して話し合われたことなどひとつもない。

リコリネは他の仕事があるため職員に向かえに来てもらい朝の7時には出て行き、他のメンバーはタケニアの仕事以外はよほどの事がない限り部下に任せてあるので、夕方5時に迎えにきてもらうことにした。

8時ごろから先に寝た順番に起き始めてくる。まずはナダンとキナシクだ。アルデもすぐに起き朝食の準備を始める。

「おはよう。アルデ、何時に寝たんだい？」

「若い二人が6時まで言い合いしてたので、それを見届けてから・

」  
「大丈夫？」

「この2人の話があまりに面白かったもので、つい・私もこの2人とは年が3つほどしか変わりませんですし、まだ若いので大丈夫です」

「・・そうか。しかし今日のミーティングが気になってな。フラッグとしてもチーム全員に仕事の詳細を少しでも早く理解してもらって自在に動けるようにしときたいからな」

それから少ししてヒトコラにペクト、フォーチュンが起きてきた。

「おはようございます！アルデさん、すいません！私もすぐ手伝います！」

「いいからちよつとあなたはロードとして今日の7時からのミーティング内容をみんなと話し合つて。わたしも聞きながら作つてるから」

全員それほど二日酔いは残っていないようだ。フォーチュンもこんなことはいつもの事なので頭の一部が働いてない感じはあるが、なんとか仕事の話はある。さつそく今回のタケニア仕事に関して自分の考えているプランを話し始めた。ナダン、キナシクが漏れを補足して詳細を詰めていき、ヒトコラからは新たなアイデアが出て、ペクトから厳しいルールが決められていく。その様子を料理を作りながらで聞くアルデは

（本当にこのチームならなんとかできるかもしれない）

と新しい可能性が生まれてくる実感を掴んでいた。

## 155人の会議

5人のフラッグの意見が織り込まれタケニアチームの方針が決まった。話し合いがあまりに滑らかに進んだことにナダンとキナシクは少し不安の残したが若いロードの感性に賭けてみることにする。またフォーチュンも6人の間では納まりよく決まったもののなにかひっかかるものがあつた。なにかひっかかるものがあればすぐに行動に出すフォーチュンは、こう切り出した。

「仕事の方針を、今日の会議で150人の部下全員の意見も聞いて反映させます」

これには5人のフラッグは驚かされる。6人の意見をまとめるだけでも難しかったのに、それに150人の意見などを加えたら方針がどの方向にぶれたるか予想がつかない。

「おい、新米ロード！無茶なことを言うな。この6人だからこれだけスムーズに決まったんだ。これに150人の意見など入れてみる。3日後、タケニアに行くまで会議が続くことになるぞ」

「事務次長補は、150人のみんなが優秀だつて言っていた。すぐに今回の仕事の真意はわかってくれるはず。・・・それにこんな仕事に巻き込んでしまうんだもの。ひとりひとりの言葉や意見をきちんと織り込んでおきたいの」

ヒトコラやアルデにもフォーチュンの言いたいことはわかる。ナダン達もこの滑らかな話し合いができるなら150人全員の意見も短時間で吸い上げることができるのではという思いからうなずき、ペクトも少し難しい顔で考えた後に折れた。

「いいか、少しでも方針の根本がずれて、話がそこから始まるようであればもう終わりだぞ。何年あっても解決法など見つからないのだからな。ひとりでもわからない奴がいれば俺の権限で外すぞ」

「あなたに勝手なことをされると本当に困るの。私からひとりひとりにキチンとわかるまで話をするから余計な真似をしないように。そんなことをしたら外されるのはあなたよ」

再びこの2人による意見の対立が顔を出したが、ペクトも出会った当初よりもフォーチュンを信じ始めているのか、そのまま再び折れた。その時点で若い3人はやはり無理がきていたため会議までを睡眠にあて、ヒトコラ達は3人は仕事の話を黙々と続けることにした。

昨日、6人が集まったホールに今日は150人がすでに集まっていた。ナダン達は顔なじみが大勢いるようだがフォーチュンは、初めて見る顔ばかりだ。まずは全員の顔と名前を覚えなければいけない。

「えー、みんな集まってるわね。私が今回ロードを務めるフォーチュン・ブリッチマスターです。今回のタケニアに関しての資料はすでに目を通してもらっていると思います。これから今回の仕事について5人のフラッグと話し合っただけの方針をこれからいいますが、必ずひとり一つ以上の意見、質問、要望を言ってください。方針の根本から話合いたい人がいればそれも結構です。それでは・・・」

もちろんペクトは渋い顔をしている。ナダンたちも本当に大丈夫なのかという不安がまた大きくなっている。フォーチュンは事の成

り行き、事態に対しての自分の捉え方、フラッグ達による補足、最終的に決まった方針の説明をして、全て話し終わった後

「はい、では質問と意見の時間にします。名前を先にいってから質問や意見にはいつてください」

と口火を開き、嵐の前の静けさのような時間を迎えた。早速、手がいたる所で上がり始める。

「わたしはグデリック・ヘミスと申します。今回の仕事は政治局と持続可能開発委員会の合同の仕事となっておりますが、ロードも含め、我々も相当な時間と行動の拘束を受け、今後の持続可能開発委員会の仕事にもかなりの影響が出ることが予想されます。その対応はどのように考えておられますか？」

これにはキナシクが答えた。

「今回の仕事は今後、新しく出来るであろう持続可能開発政治局としての初仕事となる。1つの部門で持続可能なシステムを構築し、そこから現地の望む姿に現地の現状を結びつけても、現実には望む姿に落ち着いた後もシステムが暴走する事態になってしまうのだから、タケニアの件はもう既に賽は投げられてしまっている。また実際、持続可能開発委員会と政治局で働く諸君達ならそれぞれの局だけでは限界を感じていたものも多いと思う。今回は1つ局だけではない不可能なことを、2つの局を合わせ、我々はチャレンジすることとなる。各チームには持続可能開発委員会と政治局の職員が半分ずつ振り分けている。お互いにフォローをし合いながらこの仕事を乗りきり、今後につなげてもらいたい」

「わかりました。わたし持続可能開発政治局となる噂は聞いていま

したが、ここまで事態が進んでいるのであれば、それに対応した意見をこの会議中にまた述べさせていただきます」

まだ150人いるうちの1人の意見も出終わっていない。ペクトは再びフォーチュンの顔を見る。だがフォーチュンの視線は既に、次に手をあげている部下の元へ飛び、次の意見を聞こうとしていた。



## キガ

「ステシー・モルパニです。仕事終了がいつになるのかという目処はあるのでしょうか？またこの仕事に対するロードの見解はわかりましたが、その方針通りに行く事は我々への依存度が大きすぎると思います。これは曲がりなりにもタケニア、そしてジャフェギユの問題であり、もっと両地方の人たちに音頭をとらせるべきだと思います」

これにはヒトコラが答えた。

「仕事の終了時期については3年後を予定している。それより格段に早くなることも10年以上遅くなることもある。要はタケニアとジャフェギユが交流期にきちんと機能するまでやるということだ。これに関して部門ごとに目標を達成したチームから帰還できないかどうかも検討中だ。恐らくできるのではないかと思う。それとタケニア住民にもっと任せるべきだというのは俺自身も感じていたことで、ロードもその辺はもう少し考え直す余地があると言っている。なにかいい案はあるか？」

「まずはファーストトライを我々ではなくタケニアの人にやらせてもらうべきでしょう。我々はファーストトライをする人たちの穴を埋め、それと助言を与える立場の方が後々うまくいくと思います」

ヒトコラはフォーチュンがうんうん、とうなずいているのを見て

「その意見は使わせてもらおう。ありがとう、ステシー。他に何か直す所があるか？」

とさらに意見を求めた。

「いくつかひっかかる所がありますが、しっかりした代案が浮かびません。他の人の考えに任せます」

「この会議のあと、ひっかかる所の代案がでなければ、紙にどこにひっかつたかを書いてフラッグかロードに渡してくれ。では他に質問、意見のあるものは？」

ホールに再び無数の手が上がる。優秀とは聞いてたが即座にここまで話がわかるのなら3年以内も可能ではないか？フォーチュンには嬉しい、予想を超えた戦力が加わりうとしている。

次々と新しい意見が出てくる。フォーチュンはその全てを取り入れていった。リコリネも途中から参加した会議は、後半になると既に出てきた意見の補足などに移っていき、夜中の1時には150人全員の思いを聞く事ができた。仕事について良くないと思う箇所を書いた紙をフォーチュンに渡した者が最後にホールを出て行き、7人が満足気な顔で残った。ペクトなどは

「リコリネ、よくあれだけの人材をかき集めたな。これならロードなしでもいろんな事ができるぞ」

と、部下を誉めることなどなさそうなのに上機嫌でいる。

「あの中にはお前たちよりも一歩秀でた者もいたのだが、わかったか？」

これにはペクトは会議の最初に見せたムツとした顔に戻り、フォ

「チュンは少しだけ笑ってから答えた。

「2番目に質問した私と同じくらいの女の子、ステシーですね。遠慮したのかひとつしか意見しなかったけど、後から書いた紙には私たち6人が保留にした問題に対して全て自分なりの答えも書いてありましたよ。あとよくわからない意見も」

リコリネも、そこまでやっていたかと言わん顔で笑いながら

「そのよくわからない意見がお前より1歩前にいる証拠だ。あいつはお前とペクトが行き詰まったときの保険で、一応ナダンのチームのセンター（フラッグの下の階級）ということにしてある。こういう達成が非常に困難な仕事のときには、一番優れた奴が下にいた方がいい。上がジタバタしているのがよく見え、突破口を見つけやすい。ステシーのチームは好きにさせておくように。勝手に仕事を見つけて片付けていくだろう」

とペクトを副ロードにするということも含んで話した。それでもペクトはまだ納得のいかない顔で

「ステシーとやらは何者だ？ロゼでもないな。そんな奴の名前は聞いたことがない。何故、あの年でゼロのテンディメンション以上の洞察力を持っているんだ？」

とリコリネをにらみつけた。こんなことをできるのは6人の中でもペクトだけだろう。ヒトコラも夫婦とはいえ、いまだにそこまで厳しい問い詰めはできない。リコリネは少し考えた後で

「・・・元キガだ。それも相当な地位のな。本気を出されたら私も歯が立たない。国連に忠誠は誓ってるから今は安心・・・のはずだ」

イタレナのカイナ循環社会地方にはロゼを凌ぐ秘密結社キガがある。ロゼが全ての人に対し下の立場からアプローチするのに対し、キガは常になら行動している。いくつかの国はキガに行政の全てを委ね、いまや強国を築くことに成功したが、その手法の荒々しさからキガを拒む国も多いのも事実だ。ロゼとは何度か衝突も起こっており、ロゼを受け入れる国の多さから今は均衡を保っているが、ジャフェギユにも徐々にキガの影が散らつきはじめている。

「・・・今回の仕事に奴をつかって大丈夫なんだろう？ 奴がこの仕事の命運を握ることになるかもしれないぞ」

ペクトは神妙な顔でリコリネに尋ねる。フォーチュンも今日見た感じでは信用できそうだったが、キガの、しかも重要な地位にいたのなら行動は読み切れない。

「私は今回の仕事の命運はフォーチュンに賭けた。ステシーは悪魔で保険。・・・私たちではどうにもならなくなった時に、どちらに動いてくれるかわからない保険だ」

このリコリネの言葉でホールに暗い影が降りてきた。ナダン達も厳しい顔を崩さない。リコリネですら、わからないという元キガの部下を持つことになったフォーチュンは、ロードという立場から万が一の場合、例え力が及ばなくともタケニアからステシーを切り離す方法を考え始めていた。

## 仮眠室

一同は暗い気持ちを抱えたまま国連本部の仮眠室へと足を向けた。ペクトはまだいらした顔をしながら

「ロード、なんとかできるんだろ？あの女を。貴重な戦力ではあるが、仕事 completion に近づいた段階で全てひっくり返されることも考えられるんだぞ」

他の4人も同じ不安に悩まされていた。確かに今の所はこちらに協力してくれている。とはいえキガのすることは一見、何気ない行動に見えるのだが、最後までその行動を追って見ると見事にひとつの目的のために動いていたことを思いしらされるのだ。フォーチュンも直接ではないが苦い経験をさせられたことがあり、国連で長いナダンやキナシクなどはキガと何度もぶつかったことがある。その全てをキガの思う通りにさせられてきている。だがキナシクは

「・・・キガを抜け出した者も多い。あの組織の掟は異常だから。そして目的のためなら黒を白にすることなど雑作もなくできるのだけれど、やはりそのやり方に疑問を持つ者もでてくる」

とゆっくりとした口調でステシーの味方をした。フォーチュンもさつき初めて会ったときの感触は決して悪いものではなかった。というよりも一切の後ろめたいものを感じなかったほどだ。しかしキガという組織にいれば、そんなことは容易にできるのかもしれない。

（考えがまとまらない時は動く。ビンドピット先生がよく言ったな。まとまらない時は動く・・・か）

フォーチュンは携帯電話を取り出し、ステシーの番号をチームリス

トから見つけだし、迷わず、すぐにかけた。

「もしもし、ステシー？ ロードのフォーチュンよ。 ん？ いいのよ、そんなに改まらなくても。 明日のお昼空いてる？ そう、じゃご飯と一緒に食べない？ うん、明日。 あとペクトっていう目つきの悪い男の子わかる？ そうそう。 私たちと同じ年くらいの。 その子と一緒に。 大丈夫？ じゃあ明日の12時に本部のA食堂でね」

5人がポカンとしている間に このロードはさつさと元キガと昼食の約束をとりつけた。 確かに怪しい者を調べるのは当然だが、相手が悪すぎるのではないかとナダン達はさらに不安にとりつかれていた。

「・・・リコリネは呼ばないのか？」

ペクトもキガとは何度が渡りあってきた、辛くも勝利をおさめていたが、元キガの上層部の人間に勝てる自信はそれほどない。 リコリネもいれば、あるいはキガの上の人間であつても奥底に秘めているかもしれない何かを、見破れる希望がある。

フォーチュンはニヤリと笑いながら

「無理な仕事の時はねー 一番優れた人を外しとくの。 ジタバタしてるのが、よく見えて突破口をみつけやすいから！」

と得意顔をしてみせた。 ペクトはピクつとして、ちょっとした後はあゝとため息をつき全身の力が抜ける。

(・・・なんて、女はやっかいで頭にくる生き物なんだろう)

ヒトコラがポンポンとペクトの肩をたたく。若い副ロードには未知の壁はまだまだ高く厚い。

本部の仮眠室は2段ベットがギュウギュウ詰めになっている。他に誰も寝ていなかったこともあり、誰ともなく話はじめ自然とステシー対策の話へと向かった。まずヒトコラが

「あれは間違いなく杀れる者だ。リコリネよりもひとつかふたつ遠く細かいものが見え、それらを自在に扱うことができる。そして今回の大手術のような仕事には是非ともほしい人材であることも確かだ」

とステシーをつかいたい意向を示した。ペクトは少し反対らしい。

「ここにいるメンバーだけでも十分に今回の仕事に耐えうる力を持っている。確かに奴がいれば期間を大幅に短縮できるかもしれないが、その後に何をされるかを誰も読むことが出来ない。そんな危険な奴を自由にしておいて仕事にあたるなど、とてもじゃないが俺にはできない」

ペクトの言うことはあっている。例え表面上こちらに協力してもらっていてもその間に、他に何をされるかを考えれば落ち着いて仕事に集中できそうにない。フォーチュン自身も最初からステシーを外しておくという選択肢に傾き始めてもいる。とりあえずフォーチュンは

「あなたの言う通り、未曾有の問題の始まりに不可能な仕事を被せ、さらに制御不能な部下を使うのはやりすぎにもほどがあるかもしれない

ない。ただ事務次長補が言っていた保険という考え方もわかる。ここはあなたと私の二人でステシーの本心の部分を探ってみてそれから考え直すのはそれからしてみない？」

とまずはステシーとの話し合いを優先させることを再度、強調した。ナダンは

「俺やキナシクではキガにはかなわない。あの者たちとは頭の中がまるつきり違うからな。ロードとペクト、ヒトコラ、アルデにステシーの事は任せるよ。それじゃ、おやすみ」

と言い残し、キナシクと共に早々に寝てしまった。アルデも少し疲れた声で

「私もキガにはあまり競り勝てたことがないの。3人に任せるわね」

と眠りについた。アルデはキガと五分の戦いを演じてきている。

ただ3人がいれば話はつくと思い、昨日からの疲れをとりにかかるヒトコラも

「やはりステシーについては明日の返答次第だな。離れた所から俺とリコリネも様子を伺うことにするよ。よし、もう寝よう」

と若い二人を寝かせにかかった。フォーチュンもペクトも明日に向けて様々なシチュエーションを繰り返しながら眠りについていった。



## バツヌ

カーテンからはまだ本領を出し切れていない第一恒星からの光が漏れだし、鳥たちの営みが徐々にぎやかになってくる。出発を二日後に控える1日が始まるうとしている。タケニアチームには原則、出発まで予定は何もない。各自タケニア行きの準備の時間に当ててある。ただフォーチュンは会議中にまだ仕事の概要をつかみきれていない何人かに直接会って教える約束が昼の3時から入っている。

フォーチュンが朝7時30分に起きた時、ペクト以外はみんなどこかへ行っていた。ただメモが残っており

「難敵と闘うためには睡眠時間の確保が一番！4時間前に起こすからそれまでゆっくり寝てなさい」

とアルデの字で書いてあった。約束の12時の4時間前まであと30分あるが、起きた瞬間に眠気はどっかに飛んでしまっている。それよりもステシーとの食事のシュミレーションに頭を使いすぎたためか、強烈な空腹に襲われていたので、ご飯を食べに行こうとする、ペクトもちょうど起き

「そろそろ飯でも食べておくか。考え事をしながら寝たせいで腹が減った」

と同じ境遇であったことを口にする。フォーチュンも（臨戦態勢ばつちりみたいね）とはじめてナインディメンションとして、ペクトを見られるようになってきている。

2人でA食堂へ行き、のんびりとご飯を食べた後、どのテーブルでどこに座り何を頼みどれくらいの時間に納めるかなどを綿密に練る。ヒトコラとリコリネには3つほど離れたテーブルで食べてもらうことにした。この2人はよく一緒のご飯を食べるので特に怪しまれることはない。

「さてとあとはどう話を持っていくかな」

「私に秘策があるの」

フォーチュンは昨日の夜に思いついた中でのベストの案をペクトに話した。いきなりキガの話をしては、良い話も暗転してしまう恐れがあるため、まずはペクトが今、一番深い部分で悩んでいることを何気なく漏らし、それをフォーチュンが拾い、ステシーに自分の考えをしゃべらすことでステシーの本心や真意を見極めようというものであった。もちろんそれを聞いたペクトはまた嫌な顔をしている。

「これが、ステシーの奥にあるものを引き出せるベストな手だと思うわ」

ペクトはブツブツ言いながらも拒否はしない。確かにフォーチュンの案の方が、自分の想定していた徹底的な追及よりも円満である事は間違いないし、その案なら特に打ち合わせの必要もない。ペクトとフォーチュンのアドリブがどれだけ微妙な空間を生み出せるかどうかが鍵となる。

11時45分、フォーチュンとペクトは予定通りのテーブルに座る。ヒトコラ達が座るテーブルにも既に荷物を置いている。政治局

の人間が荷物を取ったすぐあとに、ヒトコラ達が座る予定だ。

「ペクト、緊張する?」

フォーチュンがらしくない質問をペクトにする。

「お前、まさか緊張してるのか?」

「今くらい、いいじゃない! キガの上層部の人間になんて滅多に会えるものじゃないもの。知らないうちには会っているかもしれないけど」

「ステシーのキガでの位はバツ又だったそうだ。上からは3番目だな」

「それからまだ上にいけそうだったのかしら?」

「さあな。ただ厄介なことにキガには一度抜けた後でも功績次第でまた元の地位、または上にいける制度がある。現在のキガのニツガ(キガの司祭者)も抜けた後、大手柄を持ってあの地位までいったからな」

「そう・・・もしステシーがキガに戻るためにタケニアとジャフェギユをキガの支配下にいれたとして、キガではどれくらい評価されるの?」

「ジャフェギユはともかくとしてタケニアを手に入れることは非常に大きい。タケニアの人は賢く勤勉だから、いろんなことをこなす力を持っている。さらに勢力を伸ばす足がかりになるだろうから位がひとつ上がるステップにはなるだろう」

「本当はステシーのことがなかったとしても、ジャフェギユにキガが接近している時点で、もう何か対策を練らなければいけないのよね」

「タケニアがうまくいけばジャフェギユの奴らもキガなど寄せつけんだろ。どこの地方だって簡単に扱えるゼロにいてもらった方がいいんだ」

今日のペクトはなんだか心強く感じる。ロゼの中で一番のキガに對しての専門家らしい。フォーチュンには苦い思い出しかないが、泣き言など言っている立場ではない。そして仕事に入る前に、ステシーには抜けてもらうというペクトの言葉を使う勇氣も、もちろん忘れてはいなかった。

## ステシー・モルパネの決意

11時55分。ステシーが朗らかな笑顔でやってきた。これが元キガの上層部だったなどとも思えない。目の奥にある光は、フォーチュンが今まで見てきた誰よりも健やかだ。

「ステシー、来てくれてありがとう！」

「こんにちは！同い年のロードさん。あなたは副ロードのペクトさんね。お名前はよく知っているわ。前の組織がずいぶんとお世話になったからね！」

昨日の意見を述べたステシーとは別人だ。フォーチュンに少し似た明るさを持っている。だがフォーチュンとはずいぶん違うのは、経験の差なのか落ち着きようがすごい。周りの風景や触る物すべてになじんでいる印象すらうける。

「えーつとね、単刀直入に言うことやはり、あなたの過去のこと心配でしょうがないの。私はあなたを信じたいのだけど、やっぱり仕事の特性上、他の誰かがひとりでも心配な人がいれば、ロードとしてあなたに聞いておかなければいけないことがあるから」

最初のペクトと話していたやりとりとは違う方向へフォーチュンはリードした。ペクトは少しかだけ動揺しすぐに元に戻った。

（土壇場で変えやがったな。・・・まあいい。向こうがキガの話を先に持ってきたからな）

としばらくはフォーチュンの話に追従することにする。

「そうでしょうね。特にナダンさんやキナシクさんとは私自身の指揮でやりあったこともあったから、彼らにとっては心配でしょうがないはずでしょうし」

資本社会地方ロットが3年前、経済危機に陥ったときに、ロットの地方政府は国連とキガのどちらに支援を仰ぐか意見が割れていた。キガは自ら名乗りをあげ素早く国の中枢を握ってしまったため、ロゼもロットの一部の手引きで入り込んでいたのだが、キガに全員追いつけられなかった。それを指揮していたのがステシーだったらしく追いつけられなかったのはナダンやキナシク達だ。ロットは経済を即座に右肩上がりに持ち直し、今は経済強国への階段を歩き始めている。

「まず何故、キガを抜け出したの？そして何故、政治局の職員に？」

ステシーは一瞬の間も置かずにすぐ答える。

「キガを抜けようと思ったのは3年前。ナダン達と出会ったロットの件の後よ。彼らを追い出しロットの経済を立て直すことはわけもなかった。・・・でも彼らは何も邪魔しなかったの。国連にとっては当たり前なことなんだろうけど、彼らはそれどころか立ち去るとき、全て後が上手くいくようにしてから出て行った・・・彼らはただロットのことを考えていたわ。キガもああ見えて世界の調和を目指しているんだけどそれにキガの繁栄も追い求めているの。国連やロゼは違う。世界平和だけを追っている。国連、特にロゼはそれが遠因で今はまだ脆弱だけど。でも思ったの。世界にとって必要がなくなるときになくなる組織ってひょっとしたら悪魔で生き延びようとする組織よりも人間の生き方によく似てるんじゃないかって」

ペクトには最後がよくわからない。だがフォーチュンにはしっか

り伝わった。フォーチュンはペクトに「大丈夫だ」と目で合図する。離れた所にいるヒトコラ達に目を向けるとリコリネも納得しているようだ。

しばらく間を置いてからフォーチュンは覚悟を決めた。つかおう。こんな感情を持っているものに裏切られてもそれほど後悔はしない気がした。

フォーチュンはヒトコラとリコリネをテーブルに呼び、5人で改めてタケニアでの仕事について話し合いをした。結局、仕事間近に現場を混乱させたくないというステシーの意向をくみ、ステシーはそのままナダンのチームにいてもらうこととなった。リコリネの指示通りフォーチュンはステシーには自由に動いてよいという許可を与え、ステシーは自分のチームの方針をフォーチュン達に伝えた。

「私たちは最下層から当たっていく。つまりタケニアで一番困っている人、困ることが予想される人をピックアップして対処していくわ。その方がロードさんも仕事がいややすいでしょ？」

「具体的にはどのようにしていくの？」

「タケニアで手の空いている有能な人を募って新しい組合をつくる。伸縮高密度マニュアルを作って誰でも入れ替わるシステムもつくつとくわ。報酬は、タケニアでは一定額のお金を使わなければいけない資金流動制を用いているから、組合に参加した人の高額品を買うためにある目的貯蓄金の特別枠に加算できるようにできないかと思ってる。資金源はロス資産を使ってるね」

「伸縮高密度マニュアル？ロス資産？」

リコリネも首をふる。フォーチュンも初めて聞く言葉だ。キガで

は普通に使われているのかがよくわからない。

「伸縮高密度マニユアルっていうのは個人に合わせて、これからすることに対し、どれくらいの質にしたいかによって知識の量を調節できるマニユアル。もちろん中途半端にならないように下のレベルからじゃないと読めない仕組みになっているけどね。ロス資産は、国が起こった当初の資産と100年ごとの資産、それに今から100年後の予想資産から正、副、危機の3つの生活サイクル曲線を書いて、そのうちの正の曲線から現在の評価資産を差し引いたものよ。これはプラスにすぎても問題で、正、副、危機の平均の値と現在の評価資産の差が0となるのがいいとされているわ。現在、マイナス200億ウノカくらいかな」

「・・・伸縮高密度マニユアルは大体わかったけど、ロス資産はどこからどうやって絞り出すの？」

「簡単に言えばどこにでも無駄は転がっているでしょ。でもなくしてもいい無駄といけない無駄があつて、なくしていいものを徹底的になくすの。そしてその反動を利用して、さらに出来る分だけ資産を増やせばいいのよ」

「は???」

リコリネにはなんとなくわかるようだが、フォーチュンはまったく納得がいかない。

「反動を利用？そんなことが出来ていたらみんな一人でも生きていけないじゃない！」

フォーチュンもまた、自分の世界の中での言葉を使う。ヒトコラ



とペクトは

（本当にこの女達に任せても大丈夫なのだろうか？）

と目を合わせた後、万が一のための打ち合わせが必要であること  
をお互い何も言わずに認識し、ただ、うんとだけ頷いた。

## 裏ロード

フォーチュンとステシーが険悪な雰囲気になりかけた所でリコリネは席を外し、ペクトとヒトコラも違う場所へと移動した。

「・・・あなた、本当に今、言ったことができるんでしょうね？あなたもわかってると思うけど、今回の方針は、最下層の人や自律気球が一番重要なポイントとなるんだからね。そのひとつを間違えられたら私たちのやることなんて全て水の泡となるのよ」

「わたしも指揮をとるようになってからまだ5年もたっていないけど、やることに對して全ての材料が揃わないうちは手をつけない口よ。・・・キガにはとんでもない量の地域データが揃っていて、タケニアもキガの目標進出地域だったから私の頭にまだ残っているの」

「やっぱり狙っているのね。キガは・・・」

フォーチュンについてこの言葉が出てしまい、しばらく沈黙が続く。フォーチュンの中で自問自答が繰り返される。自分よりひとつもふたつも優れた者をどうやって部下として使えばいいのだろう。信用はすることにした。言っていることは理解出来ないがやれるといっている。

（目的を果たした後になくなるものの方が人の生き方に似ている・・・か。考えてみれば良くも悪くも取れる言葉ね。それで人の生き方が・・・）

ふと、さきほどのステシーの言葉を思い出し、任せてよいものなのかどうかの検討を再びはじめてしまう。一度決めたことは決して

変えてはいけないものなのだが、迷う。組合にしても出来るのだとしたら、どのような特質を持った組合を結果としてつくるのかも把握できない。手も出せない。キーポイントの特性や方向性、将来性もわからずには、全てのタケニアでの仕事の微細な舵取りがフォーチュンの手から事実上、ステシーに移ってしまうのだ。

「あなたがロードなのね。今回の」

「・・・裏のね。私にはあなたの行動を追うことができる。現場ではあなたの思うようにやってもらっていいわ」

「キガでは、私の情報もあるの？」

「あなたはビンドピッドと一緒にいた頃からマークをされていた。いずれロゼのイレブンディメンションになるだろうってことでね」

「生憎、わたしはロゼには所属しない。今のわたしを見ればわかるでしょ？事務次長補に憧れはするけど、わたしに合う場所だとは思えないから」

「・・・そうね。でもあなたは今は結婚する気はないだろうけど、いつかあなたはするわ。相手はロゼのあるガイナの人よ。あなたにはわからないかもしれないけど、もう決まっちゃっている。あなたは重荷を解かれても前へ進みながら、後ろも見守り続ける」

「はい！もうわかったわ！・・・あなたに最下層の人たちを任せる。ただし逐一、私にもわかる言葉で組合の状況を報告して。できればタケニアの人と何かを決めたときはその時の会話を録音してほしいわ。それとあなたにこれだけ言っておく。今回の仕事はタケニアの人たちにどれだけ自分の地域を、自分の手足のように動かせるよう

になるかが大切なのよ。形を作る最中もタケニアの人をいれ、組合の骨子もタケニアの人の言葉で作り、その将来もタケニアの人に語らせること。ただ資金源に関してはあなた主導でいいわ。・・・とにかく、あなたや私にしかわからない言動でタケニアの人を動かさないように」

ステシーはちょっとだけ難しい顔をした後、コーヒーを飲む。フーチュンも意を決するしかない。能力の底の見えない部下にほぼすべての部分を委ねることを決め、続いてコーヒーを飲んだ。

## 創る未来

ステシーと別れたフォーチュンにはもうひとつの予定がある。仕事についてさらに詳しい説明を求める者達との話し合いの場を設けていたのだ。20人くらいが来るであろうと予想している。フォーチュンにはステシーとは全く反対の意味で気になっている者達がいる。意見と質問の場で

「ここにいる大体の方は仕事の特性を理解しているようですが私にはよくわかりません。後日、個別に仕事の説明をしていただけないでしょうか？」

という質問は何度かあった。フォーチュンもそれが普通だと思っていたため今日の午後の予定を空けていたわけだが、その中のひとりで

「自分にはこれからロードが何をしようとしているのか何ひとつわかりません。とても戦力になれる自信がないのでこの仕事から外してもらえますか？」

という者がひとりいたのだ。フォーチュンは一度決まったメンバーをひとりも変えるつもりがなかったので今日の話し合いに来るように言ったのだが、

（大丈夫だろうか・・・？あと実際に動き出すまでわずかな日にちしかないのに。そういう者こそ本当は必要となってくるのだが、この仕事を無理強いしたくはない・・・）

といくらかの不安を感じていた。そして1日置く事で頭の整理も

いくらかついていることを祈るしかない。

説明会の場所へ行くと思っていたより少なく5人ほどが待っている。他は、仲間に教えてもらうなどで理解したのである。説明会が始まった。

「今日の話し合いの場は仕事の詳細の理解を深めるためのものだが、はじめにこれだけは言っておく。仕事をやり抜く意志のないものは外す。ただ理解が追いつかないものにはどんなに時間がかかろうと教え込む。ではどんな質問してくれ」

まず手を挙げたのは何ひとつわからないといった男性職員だった。

「グルニカ・マトスです。まずタケニアの今後、予想される危機について対策をすることも仕事になっているようですが、自分には現在タケニアでやっていることすら理解出来ないの、とてもじゃないですが仕事に携われそうにありません。理解出来るものならば理解する努力はしますが、こんな付け焼き刃の状態で本当に戦力になれるのか自信が持てません」

フォーチュンは

「今回の話し合いの場では、一人の質問に対し、類似した他の人の質問も挟みながら受けていく。もし他の質問がしたいときでも、リンクしていない問題などないからそれにも随時、前出の質問もからめて答えてく。では・・・」

と前置きをしてから質問に答えはじめた。

「タケニアでは基幹産業として自律気球を扱っているわけだが、その管理には様々な分野の力が必要としている。人格プログラム、多機能繊維、劣化測定金属、風力分散機構、流動気象学、恒星学など数えればキリがないほどだ。特に人格プログラム、もうそんな言い方をしないほうがいいのかもしれないな。自律気球は人となにも変わらないほどの知性を持っているのだが、ここがキーポイントのひとつになっていると私は思っている」

「わかります」

「はつきり言ってしまうとタケニアの8割の問題は人格を持ち世界で活躍している自律気球に関係している。彼らは我々とは一切会話を持たないが、環境保全と人間の経済活動という一見、相対する2つを繋ぎとめるために自律気球同士で果てしない議論や行動をしてくれている。人と会話ができないのもこの部分に相当な力を使っているためだという説もあるが私は案外、遠くないと思っている。そんな自律気球をメンテナンスしているタケニア住民には計り知れない苦勞を強いている」

「そんな問題に私達が戦力になれるでしょうか？」

「職員で自律気球に関連する仕事に本格的に取り組んだなどごくわずかだろう。とにかく今回はタケニアの人と自律気球の過剰な負担さえとることから取り組もうと考えている。自律気球のメンテナンスに余計なる労力がかかっている分、ジャフェギユとの交流にかかる負担をとることでメンテナンスに取りくみやすいようにできるかもしれないし、自律気球の負担は星の環境保全をさらに人がもうひと頑張り手を入れることで自律気球の負担を減らせるかもしれない。そうすれば自律気球とも会話ができるようになりメンテナンス効率の向上も見込まれる。自律気球もいろんな会話をしたほうが故障も

少なく寿命も延びるというから、我々とも話をしたいはずだろう。とはいえ未知の分野にあたる際はそれのみに関わっていても駄目で、その行為によって影響される部分をすべて把握し制御しなければならず、いろいろ難しいのだ。そこで持続可能開発委員会、政治局の経験でタケニアに必要であろうシステム、タケニアに足りなくなつたもの、過剰に増えたものの調整をしてほしいんだ」

劣等生といつても一応は優秀な国際連合の職員だ。ひとつずつ質問に答えていくと同時に何人かの顔も明るくなっていく。だが最後の一人の質問はフォーチュンや他の職員に再び暗闇を思い出させる。

「昨日から話を聞いていると、本来してはならないことを止む得ない状況とはいえ行つてしまい、その後になんかの山積みで解決の見込みのないものまでかき集め、なんとかしようということですよ。ね。そもそも、こういったことは地方政府と長い時間をかけて協議し、本来の政治局の立場を守りきり、地方政府に託す課題ではないですか？時間との正しい付き合いを嫌い、議論を倦厭して、これから起こす現実から解決法を探り当てようとしているようですが、失敗したときはタケニアと我々はどうなってしまうのでしょうか？互いに生活の基本を失ってしまう事態に繋がるような気がしてならないのですが」

「指摘は全てあっている。ただタケニアや職員にはそこまでの責任を求めない。失敗した場合は国際法違反となり判断した事務局長並びに上級職員のみ島流しになる。多少の酌量余地はあっても2、30年は出てこれないでしょう」

刑務所が100年前になくなってからはすべての法を犯したものは全ての財産を没収された上で無人島への強制送還となる。罪の重さや種類により島が決められるのだが、そこは無法地帯と化してい



る。

「・・・たとえばあなたがどんな目にあうとしても我々のできることには限界がありますよ。ましてや自分たちの家族を犠牲にしてまで、あなた達が故意に犯したルール違反をかばうことはできません」

「・・・わかっている。だがこの仕事の意義も考えてくれ。国連やロゼの非力さがキガの勢力の拡大を許し次元違いの強さで全てをコントロールしようとしている。ではキガの支配する世の中が、我々の祖先が追い求めてきた未来だったのか？この星が望んでいる姿なのか？現実には全ての理屈を凌駕してしまう力をもっている。キガは機能する現実をつくってみせた。では我々にはそれに自由な希望も含めて創れることを証明しようじゃないか」

## 海底街と眠れぬ夜

タケニア出発まであと2日。

フォーチュンにはひとつの楽しみがあった。タケニアに行く途中にタケニアのもうひとつのパートナー地方、ピニア国のレミア循環社会地方を通ることになったのだ。レミア地方は「海底街」と呼ばれる街であり、世界を駆け巡る海底トンネルの海底駅の周りに作られた街である。海底街は地上とは違う賑わいを見せている。その中でも世界の路線の中心となっているレミアの発展は目覚ましく、ありとあらゆる人種が寸分の差別もなく暮らしている。人類が長らく神とも崇めてきた第一恒星の光から一度離れてみることを選んだ海底街の住民達は、容易な広がりやを許さない限られた海底という空間にいかにも魅力を詰め込むか、どれだけ次世代の夢をふくらませるかに腐心している。

海底トンネルはレール以外にも車や自転車、歩行者用の道も用意されている。エネルギーは、人が創り出した静の空間と相対するかのように頭上で荒れ狂う波からつくられ、足下で自分に起こる全ての出来事を見届けながら静かにただ強く生き続ける星の熱も利用している。このせいか上がり続けた海水温は緩やかに下がっている。何十年、何百年後かには下がりにすぎた海水温に対し省エネが謳われるかもしれないが海底街の住民にはどれだけの月日がたとうともそれができるだろう。必ずできる。

フォーチュンには海底街が光り輝いて見える。間違いなく人工的な光なのだが、それには第一恒星とは異質な光がある。海底の真の暗闇の中でのみ生きる事を許されたなんとも弱い位置にある光なのだが、その光は間違いなくフォーチュンの行く先も照らし、また

それなくしてはフォーチュンという人格を形成することはできない。恐らくこの街の光は、人種や生物の垣根を越え、何かの力に変わっているのだとすら思う。

海底トンネルのもうひとつの魅力はすべて透明なフレキシブルプラスチックでできているため街の上はライトアップされ、深海生物の生活を垣間みる事が出来ることだ。これに関して深海に明かりをとすことにより生態系に悪影響を与えるのではないかという意見も多かったが、近年、人間も生物の一種であり他の生物との関わりを否定すべきではないという論の延長により認められた。かといってなんでもしてもいいわけではないが、もし深海で明かりを嫌う深海生物がいても全ての深海生物に住処を変える能力が確認できたことがライトアップ論争の決定打となった。

海底街には海の生物だけではなく森もある。その森は人口の光で育ったためか、地上の森とは少し違う。個々の植物が互いを助け合っている。自らを主張するのは、自分の生命を輝かせることのみで、独立と共生を選んでいる。まるで森に鉄の掟があるかのごとく全ての生命がそれを守り、それを守る事こそ自らを輝かせると信じているかのようだ。

微弱な電流を流す事で生活エリア以外の場所の形も容易に変えられるので海底街は常に形を変えていく。どのような形になるかは誰にもわからず、なぜ毎日違う形になるのかもわからない。ゆっくりとなにかの法則に従うかのように常に変化していく。地上で言う天気のようなもので予報もあるのだが、これまた当たらない。設計したプログラマーは星に呼応させたただけ言った。そのプログラマーが星のどこに着目したのかはわからないが、面白い形や、奇抜な形など、一度として同じ形にならない。誰かはプログラマーが毎日いじっているんだろ、と言うが意外に当たっているのかもしれない。

そんな海底街を通過するだけでも興奮冷めやまないフォーチュンだったが、寝る前に今回のタケニア仕事に持っていく物に悩んでしまった。後からステシーにキガのタケニアに関するデータをもらっていたのだが、やはり何か予想をできない事態が起こりそうな気がしてならない。自宅のすべての本を携帯端末に入れ、先祖から脈々と手渡しされてきたボーンストーンも持ち出し、護身用のマルチセキュリティと長さが50cmほどの護身棒も2本持っていく。こんな物騒なものが必要な土地ではないのだが、ジャフェギユ、キガという得体がよくわからない相手との攻めぎあい発展する恐れもあるため、持ち出したいくない気持ちを振り切りカバンにいれた。

そして未知の仕事を引き受けたフォーチュンは眠れぬ夜とも闘う。フォーチュンの悪い癖で、寝る時に今後のシュミレーションをしなから寝るのだが、今回の仕事は、何が起こってくるか予想しきることができない。眠れぬフォーチュンは犠牲者を見つけることに成功した。

「もしもし、ステシー？こんな夜中にごめんなさい。今、暇？」

時間は12時をまわっているのだが、ステシーは特に眠い様子も嫌そうな態度もない。ただ

「私も明日の朝からやることがあるし、2時には帰してもらうつからね」

とだけ前置きをした。

しかし、どちらがボスなのか本当にわからない。変わってもらいたい・・・という弱い心すらフォーチュンには生まれてくる。とかく自分の守備範囲の仕事には幅広い知識を活かし力を発揮してきたが、誰もやったことがなく成功の見込みの低いものに関しては、やってみれば結果的に良いものに出たものの、その間は気が気ではない状態になる。すべての事象を正確に捉え、的確にこなす能力はフォーチュンには実はまだ足りていない。持ち前の気の強さでカバーするのだが、その後はヘロヘロになってしまう。タケニアの仕事後も恐らく当分、フォーチュンの満足のいくような仕事はできないだろう。今回はどうなってしまうのかは多少なりとも心配だ。過去にそういう状態になったときは、フォーチュンは開き直って遊び倒すことにしていた。

（あれだけのことをやったのだから、これくらい遊んでもいい！）  
本当なのかどうかはわからないが、仕事も人生を輝かせるが、それだけではつまらないことも知っている。いつか終わる生をどう使うのかはフォーチュンにとっては自由であるから、本を読み、人から学び、良いと思われる仕事をし、遊ぶ。恐らく自分は、人の親にはなれないであろうから、この人生を貫くことを心に決めている。人並みの幸せは手には入らぬが、この時代の星と人を見て、これでいいとフォーチュンが自分なりの「ものさし」で推し量った答えであるのだから後悔はない。それでもあらゆる人を信じ、フォーチュンは生きている。

ステシーとはとめどない話をして10分後には帰した。会ってひとこと、ふたことしゃべっただけで

（この子と一緒にならできるわ！）

という根拠のない自信が湧き上がってきた。特に何をすればよいとか聞いたわけではないのだが、話した言葉をお互いに高めてい

ける関係を感じる。自分の世界もずいぶん広くなったことを感じる。

「変なロードね。まああなたとなら今回の仕事はうまくいくかもね。また何か相談したいときがあれば、いつでもいってね」

その言葉を残したステシーも会う前よりも嬉しそうな顔をしていた。

「ステシー、あなたとはこの仕事が終わったあとも、また組みたいわ」

「ありがと、新米ロードさん。でもそれを決めるのはあなたではなくて、この仕事の結果が決めることよ」

「あなたはこれからも私と組みたくない？」

「未知の仕事の前にふたつ先のことを考えるのはあまりよくないわ。どうなるかわからないもの。まずはわたしとあなたの持てるもの、すべてを使ってタケニアをどうにかするわよ。それにペクトをはじめ、粒ぞろいの部下たちの力も借りてね」

「そうね。夜中に急に呼び出してごめんね。おやすみなさい」

「おやすみ！」

何気ない会話に元気をもらったフォーチュンは再びシュミレーションを繰り返しながら眠りにつく。未知の問題は相変わらず多いが、ステシーに会う前よりもすっきり整理できている気がする。

## 出発の日

あつという間にタケニア出発の日を迎えた。フォーチュン同様、他の職員もまったく腹が座りきつてない。大体の抽象的な絵と、興味本意で獲得してきた知識と、怖い思いはしたくないという気持ちから体得した護身棒を頼りにタケニアへ行く。こんなロードを先頭にして腹を座らせられるものなどいるわけがない。国連では、指揮権の移動がよくあり、それにあわせて職員もどんなポジションでもできるわけだが、今回はペクト以外、誰も前に出てこようとしない。リコリネでも無理であつたタケニア仕事を自分が出来るとひとかけらでも思える人材はまだ育っていないようだ。

そんなちよつと暗めの職員の元気を出そうとフォーチュンはバスで出来るだけ海底街を寄りながら、タケニアに行く事にした。運転手には

「あんた腕はいいわよね？海底街以外ではビュンビュン飛ばして。もちろん安全運転でね。あと、みんなが寝ている時もスピードメーターはあまり見なくていいわよ」

と相当、無茶なことを言つてあきれ顔にさせている。運転手の後ろに座っているステシーは聞こえない振りをしながら、ライトアップされた深海の様子をのんびりと見ていた。海底街へのトンネルは広大なものをつくるのは難しいが、新しくつくるのは比較的簡単で、先ずは高速パスとして使われ、そこから一般道路や歩道、居住区、商店街、森などがつくられてく。ベイロプラスティックフィルムが開発されてからは、海底ケーブルと同じように船の上から15cmほどに圧縮された5重の層を持つトンネルをたらしていき、あとで通電し、海底に1枚目の層が海底に合わせ密着し、2番目の層が平

らな道をつくり、残3枚が何かのトラブル時に圧縮されたまま脇に置かれている。

あまりに科学の進歩が進みすぎたとき、フォーチュンは

（なんだが面白くない世の中になりそうね）

と思ったものだが、海底街ができてからは

（ここまで現実離れしているものができるのならいいわ！）

とすぐ自分の予感をひっくりかえしていた。

地上と海底ではやはり違う。トンネルになにかあればどうすることもできないという不安からきているものなのか、悠久の間、育ててくれた第一恒星の光から隔離されているためなのかはわからないが、すべてをを押しつぶそうとするかのようなプレッシャーのようなものと、それに対してなにとかして生きなければという心の深い場所での叫びが発せられ、何か気持ちを強く持つ必要に迫られる。このことは海底トンネルができた当初からわかっていることだったのでフォーチュンは

（わたしは、自分自身のやりたいと思えたこと、理想も現実に行ける人間になるために日々の努力を怠らない）

という自分の信念の再確認をしながら海底へと入っていった。他の職員もそれぞれに自分の思うものをしっかり受け止めているところだろう。



海底バスでタケニアに向かっているのだが、またフォーチュンの思いつきが始まった。フォーチュンはすべてのバスにつながるマイクを掴み

「えーみんな聞こえてるかな？海底街は魅力が多すぎる。いや、これはわたしの勝手な思いなのかもしれないけど。タケニアには一週間後につけばよい。そこで、ここからはこのままバスに乗ってでもタケニアへいってもいいし、海底街を楽しんだ後、この先のピンロング海底空港からタケニアに着いていてもいい。その際の領収書だけわたしに渡してほしい。それでは次の海底街ピンロングでバスを止める」

としかいわずにマイクを切った。職員はぼかんとした顔を見合わせ

（まさか、もうはやロードは海底にやられたのか？）

と同じ思いを襲われた。

## フォーチュンの言葉

ピンロング駅での2時間の休憩中に各職員は話し合い、5台で出発した国連バスのうち4台までが帰ることになった。大体チームごとに行動するようだ。海底街は50年前にできたのだが、まだ行ったことのない者や、フォーチュンのように魅力にはまり込んでいる者も多い。

フォーチュンはバスで行くことにした。ステシーやペクトもついてきてくれるらしい。

「あんまり思いつきをやりすぎるなよ。ついてくるものがいなくなるぞ」

ペクトは今回のタケニアまで、自由を与えたことは賛成らしいが一応、釘を刺しているつもりらしい。

「わかってるわよ。でもこんな素敵な街を通るのにひたすらプレッシャーと戦って行くななんてさびしすぎると思わない」

「それに領収書とかいってたがバス代以外は落ちんぞ」

「わたしが出すからいいの。内緒にしとこうかと思っただけど、今回のわたしの契約金は1000万ウノ力だし！」

「・・・国連もお前も太っ腹だな。まあお互いここをしくじったら終わりだから、いくらでも払うだろうな」

「まゝた、あんたはつまない話をする！してもしなくてもいい話

で人を暗くさせないで！まあいいわ。あんたのそんな根暗加減すらこの海底街の光は薄めてくれる」

「なにをいつてるんだ」

海底街はペクトにはあまり影響を与えていないようだが、フォーチュンはすっかり自分の夢の中にはまりこんでいる。

ステシーのバスの席はフォーチュンの隣なのだが、時折、小さな声でしゃべってくる。

「この残ったメンバーを仕事の最後までタケニアにいさせるつもりなの？」

「・・・確かにそういう意図もあるけど、そうとは限らないわよ。ただどちらかというに残った人は海底街よりも仕事の成功への思いが強いというだけで」

「先にタケニアにいった人もいるのかしら？」

「あとの領収書をもらうからわかるけど、はつきしいって、しょっぱい小さな会社じゃないんだからわたしは今回の行動でどうこうというのは決めないわよ」

「バスに残った人に特典を与えとかもないのね」

「あなたサラリーマンかなにかをしていたの？わたしは別の視点でも人の適性を見分けられるし、そういうことは一切しないってミーティングでもいったわ！」

「あなたはすぐに変わるから」

ペクトと同じことをいわれたフォーチュンは

「わたしは自分の言葉に対しては、自分の子供を生むような気持ちで命を吹き込んでいるの。その子達を簡単に見殺しにはしないわよ」

とすこし怒気を含んでしゃべった。はじめてステシーが押し黙る。

「・・・とにかく職員はみな優秀だし、今回の仕事は精神的に過酷だから、わたしは自由を与えられるところには少しでも与えておきたいの。そのために私財も投入すれば、リスクも犯すわ。でもそれくらい今回の仕事というのか、挑戦は今後100年を占うものだからやれることはやっときたいの」

ステシーは少しだけ困った顔をやわらげたものの、まだまだ先に控えているものが多いことを暗示するかのようにゆっくりしゃべりはじめた。

「あなたは熱くなりすぎる。こういうときこそ熱を最小限に抑え、最後の仕事の完成時に、その熱で封をするのよ。今回の仕事が終わった後は今回のかかった時間を踏まえて負荷の少ない仕事で力を取り戻し、今回の経験も踏まえた潜在的な熱も取り戻す。仕事のサイクルってそんなものじゃないかしら」

## タケニアへ

そして、一週間後。

もちろん全員が着いている。上空を無数の自律気球が覆うタケニアへ。

タケニアの建物は木材や鉄鋼山の金属を使うことが150年前に禁止されてから全ての素材に砂漠の砂からとれる石英、ガラス、カルン石、輝石からとることが決められているため、砂を高圧力によりつくられた石や砂に微量に含まれる金属を精製し作った鉄筋を利用した鉄筋石でできている。人々は自分の住まいに思い思いの彫刻を施し、街や村は個性が渦巻いている。また最近、砂からカーボンに似た素材を作り出す技術が生まれたことから、世界の主原料を一時期の石油から砂へと変化してきている。砂漠化発端の気候変動を止める有効な手だてとなったことは言うまでもない。

砂漠化したままの場所には自律気球が「やつと休憩所があった」といわんばかりに群れをなして休んでいる。実際に自律気球はしゃべれるのだが、自律気球同士でしかしゃべらず、人には警告音や固定メッセージボードでしか語りかけない。相当、人間が嫌いという噂も本当かもしれない。自律気球同士はネットワークで繋がっているため、人間と話す仲間からのけ者にされてしまうのだからという話も聞いたことがある。人間と喧嘩になった原因はメンテナンス不足や、バージョンアップが自律気球の「人格」形成にダメージを与えるなどらしい。最新情報では第172バージョンアップの後、なんと自分たちでバージョンアップを管理しはじめたようで、どんなにタケニア住民が無理にしようとしてもそのプログラムは弾き飛ばされてしまうとのことだ。タケニアの人でも強引なバージョンア

ツプで残っている絆をなくしては、どの自律気球もいじれなくなってしまう。

タケニアに着いたフォーチュン一行は、まずはタケニア政府の官邸を訪れた。ダット・スカルフ代表は気品と自信にあふれた、誰もが好感を抱くような紳士だった。

「ようこそ、タケニアへ。フォーチュンさん。自律気球に砂でもこぼされる意地悪はされませんでしたか？」

「お初にお目にかかります、ダット代表。でも自律気球ってそんなことをするんですか!？」

「冗談ですよ。でもこれは自律気球の前で言っては駄目ですからね。本当にこぼしかねないので」

「・・・それも冗談ですよね？」

「まあ彼らの話はもういいでしょう。今、危機に瀕してるのは彼らではなくて我々ですからね」

（タケニアでは自律気球がお茶目なことをしてるという話は聞いていたがこんな冗談が聞かれるくらいだから相当なのだろう。そろそろ自律気球からこの代表まで出るかもしれないな。ところで本当に砂を落とす事なんてあるのかな？）

ダットの話の片耳で聞きながらフォーチュンはこんなことを考えている。

「今、一番警戒している問題はどのあたりですか？」

「自律気球の事故はもうないと思うよ。バージョンアップを彼らが管理するようになってから自律気球自身で相当頑張ってくれているからね。問題はジャフェギユの連中がこっちに来たときの自律気球への影響と、この人間が向こうへ行くときになるはずだ。なあフオーチュンさん、なぜ国際連合は三社会交流制度なんてやつかいなものを作ったのだい？これさえなければなんとかできるのだが」

「三社会交流は、この時代のニーズに対応できる人間が圧倒的に少ない現実に対し、多少は強引でも交流を通して人を成長させることも目的の1つです。気候変動が大気の対流速度の上昇、つまり急速な砂漠化に起因していることがわかってから、人工的な森が生み出すことで対応はできていますが、この森もまだ強い命を持つておらず、我々や自律気球が手を差し伸べていかなければまた元の砂漠に戻ります。我々にはこの森をさらに強くし、砂漠化を止めておけるだけの力をまだ持っていないのです」

「ずいぶんディープな話になりそうだね。あいや、よくわかった。だがタケニアの者はその話を理解できるが、ジャフェギユの連中はどうだろうね。そんなことに手を差し伸べていたら、ジャフェギユでは仲間同士で命を差し出す事態につながりそうだよ」

「それも予想の範囲内です。そこでタケニアやレミアとの交流、1年の星の環境保全奉仕を通じ、彼らにも意識改革、自己啓発できる人間になってもらうことが三社会交流の本質の部分です」

「おそらくすぐには無理だろうね。最初のうちの相当数のトラブルは覚悟しておかなければいけない。あいや、よくわかった。それでは我がタケニアの話に戻そう。最新のタケニアの状態はこうだ」

ダットからの説明が続く。フォーチュンや他のフラッグもタケニアの直近の情報を得ることで、頭の中で自分なりの方向性を出す作業をしている。



## 人と話す自律気球

説明が終わった後、ダット代表はフォーチュンが自律気球から頭が離れていないことを察し、あることを思い出した。

「そつえば、ついに昨日、快拳があつてね。なんと我々に話しかける自律気球が2機現れたんだ」

「え！？自律気球は人とはしゃべらないんですよね？」

「バージョンアップごとに人ともしゃべれるようなプログラミングは常にしていたのだが、昨日、172年ぶりに人と話す自律気球がついに出てきたんだ。市民権も与えているのに我々に一言もしゃべらないなんてどうなってるんだと思っていたが、ついに出了んだよ」

「ダット代表はもうしゃべられましたか？」

「すごい生意気な奴だね。少し話したら嫌になってすぐに帰ってきちゃったよ」

「私たちも話すことができますか？」

「どうぞ、どうぞ。でも嫌みを言われたからってうちの仕事の手を抜かないでくださいよ。ははははは！」

（スギモリ事務次長に似てるな）。最近の上にたつ人の間でブームのノリなのかしら）

この嫌いではないノリを受け流しながらも、フォーチュンの目標

は自律気球に一直線に向かっていた。

「是非お願いします。彼らがひよつとすると今回のキーポイントのひとつになるかもしれませんからね」

「自律気球がかい？私はそこまでの比重はないと思うよ。わたしらやジャフェギユの連中の問題のはずだ。かれらの『人格』は元々、事故回避のプログラミングに無理がきたことや『人格』を持たせるとその言葉や行動などから機微な異常が発見しやすいというメンテナンスの観点から生み出されたものでもあるからね。確かに彼らは未だに解明しきれっていない第一恒星の光との接点が強いせいなのかよくわからないが妙なトラブルを生み出してくるけど、そういったケースにはオーバーホールがかけられるから特に大きな問題に発展しないよ。それに自律気球は我々の言動を人格形成の模範としている事がわかったが、バージョンアップを彼らに任せてからは彼らでうまくやってるようだから、そこまで神経質になる問題ではないと思うってるんだがね」

「自律気球にオーバーホールをかけて人格に影響がないんですか？」

「恒星光か宇宙線、ニュートリノや暗黒物質という説もあるが、原因不明のトラブルは私らの中では事故と呼んでいて事故した自律気球をほっておくこともできないからね。そこは機械的に直すことにしているよ。事故した気球を直している最中、他の自律気球たちは、とても不機嫌そうにしているがね」

「人側の視点だけでは見落としていることなどはなさそうですか？」

「あなたは自律気球をお持ちかい？」

「はい、ですが、この仕事のためにも、ここの住民権を持った自律気球を1機購入することを検討しています」

「毎度ありといえいいのかな。はははっ！まあ実際、タケニア製自律気球を所有してみればわかるけど、住民の資格を持つているとはいえ、やはり機械だよ。感情も、メンテナンスと自分の役割からはみ出ているものが少ない。自律気球にそこまで意識を持つていかれる必要はないはずだ。リコリネ君も気にはしていたがそこまで対策は打たなかったよ」

「はあ・・・」

そう言われてもフォーチュンには確信に近い手応えを感じている。そして自律気球側の視点持つ事が全ての解決の近道である予感がしていた。

「それと自律気球のメンテナンスとバージョンアップの現場に行きたいのですが」

「職権を使って君の自律気球を無料でしゃべれるようにバージョンアップしてもらうのかい？ははは！冗談だよ！確カリコリネ君の話では君らが現段階で高負荷職場の余分な負荷を取り除く事にも協力してくれるようだね。しかし、我々でも200年も携わってきて相当、効率を追求してきたつもりでもう他にできることはないと思うのだがどうなのだろう？」

「外部からの新しい考えは物事を変化させます。それに自律気球産業のみを追求しているとそれ以外のことの抜け落ち、その抜け落ちた部分に案外、重要なことが含まれていることもあると思いますので。我々の部下はそれぞれ何らかのエキスパートであり、みな優秀

です。効率追求だけではなく、何か余計なことをすることで全体の流れや効率がよくなることも考えられますのでお役に立てると思います」

「そうか。たしかに自律気球以外のことはさっぱり駄目な連中がごろごろいるからね。我々にとって自律気球さえやっていればなにも困る事はない。おかげさまで経済状況にしてもなにも問題ないが、なにかすっぽり抜け落ちているような感覚にたまに陥いることがある。君たちに任せるよ。困ったことがあればなんでも言ってくれればいい。これが私の電話番号だよ」

## 会話

ダットが素早く2機の自律気球との面談を手配してくれたため、1時間後には話をする事ができた。

「こんにちは。えっとお名前はスミスとタフクね」

「はじめまして。仲間とのネットワークを遮断してからはわからないことが増えてね。フォーチュンさん、あなたのことは何もわからないんだ」

スミスが話す姿を初めて見た職員たちは動揺を隠しきれない。

「おお！本当に自律気球がしゃべってる！！」

「すごい流暢じゃないか！人格プログラムってここまで優れていたのか！？」

「うわー自律気球の前で変なこと言えなくなるわ！」

チームのほぼ全員がらしくもなくガヤガヤしだしたのでフォーチュンは何をいまさらとイライラした態度で

「ちょっとうるさいわよ。この2機に失礼だと思わないの？静かにしてなさい！」

少し険しい顔をして職員たちをたしなめる。

「ごめんなさいね。スミス、タフク。私も自律気球がしゃべれるこ

とはもうないと思ってて、それどころか172年もしやべらないと実は得に考えていることもないんじゃないかという噂もたつくらいでね。この人たちの中でも話せることを知らなかった人が多いと思うの」

「私たちが開発された200年前は随分、人とも話していたらしいが昔にある事件が起きたんだ。組合を作った私たちは、人と話すことを拒否することを決めた。あれは私が作られてから2年目の出来事だったな」

「あなた、175歳？」

「人間に言わせると175年前に作られたのはオンボロ自律気球さ。最近のバージョンアップで人とのコミュニケーションツールは充実したが、わたしの人格が仕事と人とのコミュニケーションの間でついていかなくてね。寿命といえば寿命なんだろうが、そこから私より5年遅く作られたタフクと一緒に仕事や仲間から逃げてきたのさ」

やはり自律気球との話し合いから、今回の問題の根本が見えてくる気がする。それと同時にフォーチュンは

（これはタケニアが他の地域では見落としてしまう問題を拾ったが故に起きているのでは・・・）

とひとつの仮説をたてておいた。

「173年前に起きた事件ってなに？」

「たいしたことではないよ。ただ人に話すことは駄目なんだ。いくら仲間たちともネットワークが切れていてもね。まあこれだけは教

えといておこう。あんたら人間のエゴが原因さ」

「エゴ？」

「そう気にすることはない。我々、自律気球だつてエゴはある。人格を形成する上でなくすことはできないものなのだろうな。なくさなければいけないものだとも思わないしね。ただ大きすぎるエゴが人間全体に、あの頃は残っていた。我々でも受け止められないほどのね」

「今の人間は、少しは頑張つてるでしょ？」

「少なくとも私は随分、変わってきたと思うよ。あんたみたいな変な女でも、私たちに配慮をしてくれようとしている」

「変な女か・・・まあいいわ、よく言われるし。でもなんで今でも私たちとしゃべってくれないの」

「なぜなんだろうな。私らのなかにも格付けがあつてね。私は下端だからなにも教えてもらえなかったけど、上の方の機が決めたこととみたいだから。上の機は全体のことをきちんと考えていて、言われた通りにすれば、まず上手くいったからね。みんなの信頼は絶対だよ」

「バージョンアップはあなた方で管理することになったのよね。あなたは、なぜその仲間たちと離れたの」

「管理することが決まる前に逃げ出したものでね。二人で気ままに生きてから死のうと思つてたのだが、私なりには今回はタケニアの人間連中のピンチだと見ていたのはあつてね。君たちと話すことを

決めたのさ。私たちは一心同体だ。黙っていちゃなんにも解決しないとも思っからね」

「自律気球の上の機が危惧していることってなんなんだろう？」

「上の奴はデータの全てリンクさせている。その上で、自律気球と一応、人間のことも『考慮』して行動しているようだったよ。特に何かひとつの問題に危惧しているとかはないだろう」

「そうか・・・じゃなにをすれば上の自律気球の負担がとれると思う」

「あんたは面白いね。そうだな、上の奴の何を『考えてる』かなんて、こつちが『考えて』こなかったからね。何をしてほしいのかね」

「上の機と話し合えないかな」

「あんたじゃ無理だろう。リコリネっていう賢いのが国連にいてね」

「私の上司よ」

「そうか。そいつはしゃべることが許されただけで、やっぱり話はまとまらなかった。いい線まではいったって聞いたけどね」

リコリネもやはり自律気球になにか引っかけたのただろう。しかし何故、このことを一言も言わなかったのかという新たな疑問がフォーチュンに浮かぶ。言ってもフォーチュンには何もできないと思っただのであろうか。

「事務次長補でも駄目だったのか・・・」



「あんた、ロゼじゃないだろ。キガでもないな。そこのお兄さんは恐らくロゼかな？後ろのお姉さんはキガだとわかるんだが」

ペクトがロゼであることもステシーが元キガであることが自律気球にはわかるようだ。

「わかるの？」

「あんたわからないのかい？結構、鈍感なんだね。キガの奴はね、自分の思考を垂れ流しにすることが一切ないんだ。あんた、あのお姉さんが何を考えてるのかさっぱりわからないだろ？」

ここでステシーは固い表情を崩し、話に参加する。

## 真実

「ハイ、スミス、タフク。私は国際連合政治局センターを任されているステシー・モルパニよ。ご察しの通り元はキガに所属していたけどね」

「ステシーさんか。へえ、あなたはすぐに自分の色を変えられるんだね。キガでは結構、上までいっただろ」

「ぼちぼちよ」

「そんなあなたがなぜ国際連合に？それとも、いつか国連を裏切つてキガに戻るのかい？」

「なぜかは今、話す気分になれないわ。でも私は国連に骨を埋めるつもりよ。そのためにあらゆる努力をする」

「国連もずいぶん、面白い組織になったじゃないか。こんな変な女を二人も雇うなんて」

自律気球との軽快な話はどんどん続いていく。ペクトにはなんのためにこんな会話をしているのか意味がわからないが、相当数のメンバーが固唾を飲んで、この会話を見守る。フォーチュンとステシーはタケニアでの仕事を前に、自律気球との間に絆を作ろうとしていることをしっかりわかっている。

今度は話の主導権をステシーが握った。

「ところでスミスは下の立場だったことはわかったけど、タフクは

どのくらいの地位だったの？」

「タフクは真ん中くらいさ。製造から172年たって、まだこの位にいるのはわたしくらいだよ」

「タフクさんとは話せないの？」

「タフクはまだ人間としゃべり慣れてない。わたしはまだ例の事件の前に作られてるから、人ともよくしゃべっていたからね」

「少しでも話してみない？タフクさん」

しばらく沈黙が続く。せつかく打ち解けた関係が冷え込もうとしている。タフクがしゃべりそうもないので、スミスがフォーチュンが話に入ろうとしたのだが、その一瞬だけ先にタフクが反応する。

「こんにちは、ステシーさん。あなたとなら話せそうだ」

「ハイ、タフク。何故、私となら話せそうなの？」

「なんでかな？人と話すのは初めてなんだけど、あなたとならいろいろ話ができそうだと思えたんだ」

「ありがとう。あなたは立場的に真ん中くらいにいたのね。スミスさんの知らないことも結構、教えられているのでしょ？」

「そんなにはないよ。確かに自律気球同士の秘密は完璧という言葉が使えるほどだから、話せないことがあるけどね。それはスミスさんもわかっているから聞いてくることもないよ。キガの秘密も絶対だと聞いているから、あなたにもわかるでしょ？」

「そうね。これでもうひとつはつきりわかったことがあるわ。17年前に起こった事件のあと、自律気球の一番上の機はキガに入ってたのね」

「・・・・・・・・・・？」

国連職員一同はもちろん、フォーチュンとスミスも言葉をなくす。

「あなたはすごいね。何故、国際連合のセンターなんかで仕事をしているんだい？となりのお嬢ちゃんよりもよっぽど視野が広いね。リコリネよりも。さてと、やっといろんな事が話し合えるね。私はこれを見抜けるような人ではないと話しても無駄だと思っていたんだ。実は国連同様、私もキガのやり方には『共感』できないし、他の自律気球の中にもそういう『考え』の機はいっぱいいるんだ。みんなでどうすればタケニア全体を良く出来るのか一緒に考え行動してみないかい？」

フォーチュンは真ん丸の目を直すことができない。他の職員など「キガはどれほど前からタケニアに進出していたんだ」と気を失いそうなものまで出ている始末だ。だがフォーチュンは、なんとか持ち直し、まずはステシーを問いつめる。

「なぜ、彼がキガだとわかったの？ひょっとしてあなた知っていたわけ？知っていたとしたらなんでそんなことを話してくれないの？」

「落ち着いて。私だってあなた方が話している最中にわかって頭の整理が追いついてない部分もあるんだから」

「じゃまず教えて。なぜキガだとわかったの？」

「キガではあらゆる情報がそろっているけど、上層部でしか知り得ない情報もちろんあるわ。でも知り得るすべての情報を把握すれば、足りないピースも自然と形づくられてくるのよ」

「それが自律気球はキガの支配下にいたってこと？」

「可能性のひとつとしては考えていたわ。あとタフクも元キガの私となら話せるといっているし、キガの話しかしてこなかったから」

「そんなことでわかるものなの？ なにかキガの見分け方でもあると  
いうの？」

「それはあることはあるけど・・・」

「それはなんなの？」

「あなたも覚えておいたほうがいいわね。これはビンドピッドの言葉らしいけど、しゃべらないのは大体キガだって」

## 世代交代

自律気球がキガに入っているという想定外の事実を受け止め、まずは彼らをキガの手から取り戻す必要があることを確認する。

「ダット代表はこのことを知っているの？」

「あいつは私らを単なる機械だとは思っていないよ、まったく冗談じゃない。あんた、人格プログラムが搭載された自律気球がなぜ、あれだけのメンテナンスを受けながら、いくつものトラブルステージのステップを一気に飛ばして、事故や機能停止につながっていたかわかるかい？ 恒星光のせいだなんてバカがいるけどまったく話にならない」

フォーチュンは耳の痛みも置いといて、今聞いた事実を元に仮説をたてる。

「自律気球の突然死？」

「近いね。人間と森の間に無理がきたとき、自律気球は犠牲になるのさ」

「・・・砂漠と森の寂然としない境目は私たちの姿のように見えていたけどだ・・・あの境目はあなた方の犠牲の跡だったというの？」

「同じさ。あんたたちは俺たちの犠牲の上になりたっているんだ。あんたに人格プログラムの残酷さがわかるかい？ まったく、人が自分の手で砂漠に変えという、それを私らを犠牲にして直そうとするなんてとんでもない話さ。これで何故、自律気球が人と話さないか

もわかっただろう。173年前の事件などただのきつかけだよ」

「まだ奥がありそうね」

「偉い奴ほど口数が少なかったから、なにかあるんだろうね」

「キガとも話さなければ駄目ね。・・・ステシー！」

「なに？」

「まだキガにお友達はあるの？」

「それはいるけど、あなた物事を簡単に考えていない？172年以上昔から続いてきた事を変えることなんて早くても10年か20年かかるんだからね。ちなみに私の読みでは100億の自律気球全機が穏便にキガの支配を抜け出すためには半世紀はかかるわよ」

「私たちが73歳になったところか。人間はみんな世代交代してるわね」

「それに必要な要素のひとつ。そして安定させる為にさらに半世紀。私たちは早くいい男を見つけて、子供にこの仕事を託さなければ駄目ね」

「この仕事をしながらいい男は見つけられなさぞ。はあ、リコリネ事務次長補は言っていたのはこれか」

「世代を超える仕事をあなたは受けた。引くなら今よ」

「いいわよ。73歳まであなたと仕事ができるならそれはそれで嬉

しいもの」

「私はセンターだから自分の仕事をすぐに済ませて帰っちゃうかもよ」

「いいえ、そんなことはさせない。あなたはナダンさんと交代でフラグに昇格させるわ。だってナダンさんが102歳になったら、ちよつと腕が落ちそうじゃない？」

ステシーの「二人だけで話して決めることではない」という意見で5人のフラグを呼び出した。人としやべる自律気球から、仕事をはじめの前から方針の再検討が余儀なくされてしまった状況だ。それでもフォーチュンは変更を最小限に抑えることを真っ先に考える。

「部下たちには前の方針通り現場に入ってもらいましょう」

ペクトも

「どう転んでも、タケニアの現場に無理がくることは確かだからな。早いうちに入ってもらっていたほうがいいだろ」

と賛成にまわる。

「だが方針が定まらないまま闇雲に現場にいつてもどこへ導き、なにを目的に負担を減らすのかで混乱してしまうぞ」

ヒトコラが意見を挟むと一同は下を向いてしまふ。自律気球が話



し始めたことやキガに所属していることで今回の方針転換が決まったわけだが、今後まだ知らない情報のために方針がぶれる可能性があるためだ。

「まずは現場へ部下をやって現場になじんでもらうわ。現場の仕事も覚えてもらう。方針の伝達は、ダット代表と自律気球、ジャフェギユ代表とレミア代表、できればキガのニツガ級と話し合いの場を設けた後よ」

「行き当たりばったりになりそうだな」

「そうならないようにするためには話し合いの場で詳細をどれだけ詰めれるかよ」

「ステシー、キガのお友達とは話はできそう？」

「話是可以るけどなんて言うの？『自律気球をロゼに入れたい』とって『どうぞどうぞ』なんて連中ではないわよ」

キナシクもそこらへんが気にかかっている。

「うまくやったとしても本当に50年後に自律気球は我々の味方になってくれるのかどうかも疑問ね」

「俺とキナシクは20年後にはリタイアだな。ヒトコラ。お前も80歳くらいになってるな。そのころにはお前、ボケてるぞ」

「ナダンさんは土葬が希望でしたよね。そのころにはお花にでも生まれ変わっているだろうから、墓参りの時はなるべく踏まないよう気をつけますよ」

ペクトが冗談の流れを切って話をリードし始める。

「まずはダット代表から話そう。それからタケニア、ジャフェギユ、レミアの主な地区長たちとも話さなければ動くものも動かないぞ」

フォーチュンもペクトの意見に続く。

「タケニアの人の子供とも言える自律気球は賢い。タフクたちがこつちに来るくらいだから半数以上の自律気球がキガの勢力だけではなく国際連合やロゼに近づきたいと思っているのは確かよ。今回の本当の問題はここだったんだ」

## 会議前

それから3日がたちそれぞれの地方や地区の代表、自律気球を集めた会議が始まるうとしている。

「キガのニツガ、バルク・トーセルが来てるわ。リコリネ事務次長補もさつき着いたばかりよ。自律気球も1番機のピニアも来てる。ジャフェギユやレミアの人もね」

ステシーがすべて主要な面々を全員集めてみせた。実はフォーチュンも呼んでいる者達がいる。

「この会議にタケニアチームの部下全員も呼んでおいたわ」

「何故？」

「決まったことに色を加えず忠実に手助けできるのはタケニアチームがベストだと思うから」

フォーチュンの自律気球ミグも一般の自律気球として参加した。

「ミグ、一時的な会話許可がキガから降りたでしょ？あなたも話せるのよね？」

「フォーチュンさん、あなたとはずっと話したかったです」

ここでバルクが口を話す

「ミグ。君はまだフォーチュンとは話せない方がいい。わかるだろう。まだすべてが早すぎる」

「わかっています」

この言葉で寂しさと悔しさが込み上がってきてしまったフォーチュンは、1番機のピニアに話を移すことで自分の気持ちを紛らわす。

「自律気球のあなたに聞くのもどうかと思うけど、人格ってどう作り上げてるの？」

「まずは記憶から説明しようかな。私らは人間が元から持っている何かを犠牲にしていけば、ほぼ無限の記憶力を持てるのとはほぼ同じ作りになっている。その何かは煩悩でもよければ悲観でもネガティブなものでもいいから人間の大半はそうしているね。悲観はある程度もっていなければただの楽観者になってしまうから注意が必要だし、煩悩をなくしすぎれば夢がなくなってしまうので、これまた注意が必要だ。あんたらはコンピューターが記録を自由に出し入れるイメージを、私らにも重ねているかもしれないが実は違う」

「そうなの？」

「わたしらの人格プログラムは、情報の蓄積がその目的じゃない。情報によって人格を形成していくと云えばいいのだろうか。信念を作るって言葉を使った奴がいたな。少しニュアンスは違うが結果的にそうになっているのかもしれないね。それを日々、研鑽していかなければ競合する情報が蓄積し150年くらいで機能停止してしまう」

「そして、いつかは『人格』も死ぬのね」

「そうでなければ自律気球の時代が進まなくなり、人との会話どころかデータ会議も出来なくなってしまうよ」

「毎日、同じことをやってるわけにいかないものね」

「自律気球の生とはそのようにできていない。人間もそうだろう？」

「でも人間は最近、死んだ後に残す物に対して、がさつになってきてるわね。あなたがたの方がその点で優れていると言えるわ」

「自律気球は人間と同じ立場になろうとし、死に物狂いの研鑽の結果、わずか180年でその地位を得たんだ」

「人間も負けてしまいそうね」

「そのうち国連に自律気球が進出することも考えられるよ」

「それはあるわね。政治局で雇えるよう事務次長に話をしておきましようか？」

「自律気球と人にとっていい機会になるだろうね」

「わたしはあなたの方が好きなの。真摯な姿や実直な言葉を使うことを守ってきたあなた方の努力と苦労が私を突き動かすの。一緒に働いてみたい、一緒に話してみたい。一緒に生きてみたいって」

「私たちの距離が近まれば、あなたのタケニアでの仕事も相当進むだろう。でもあなたはそれが目的というわけではない。わたしもあなたが好きだよ」

「結婚しようか？どんな子供が生まれるでしょうね。うふふふふ！」

この様子を見ていたダット代表はたまらないという顔であきれた笑いをしながらリコリネにはなしかけた。

「いやいや、リコリネさん。すっかりキガの連中に騙されていたね。まさか自律気球を味方に引き込んでいるとは夢にも思わなかったよ」

「フォーチュンの行動力とステシーの洞察力、チームの仕事に対する思いが我々の力を遥かに上回ったのです。いいチームの力は無限大です。我々ではかないませんよ」

「誰がこの会議の議長を勤めるんだね？」

「それはフォーチュンでしょう」

## 真実（２）

それぞれ集まった面々では雑談に花が咲いている。今は、タケニアの地区長が演説を始めたようだ。

「自律気球が私らを見ている以上、私らの生き方がそのまま自律気球へと受け継がれてしまうことが考えられる。代表は自律気球はただの機械だと言うが違うね。あいつらはもう我々と変わらない。我々以上に物事を考えているよ。奴らはヴァージョアップにさえ耐えられれば永遠に生きることになる。遠い未来に寂しい思いをしたくないのか先のこともちゃんと考えているんだ。それに比べ、人は自分の子供や孫まではかわいいが、その子供以降には非常に冷たいからね。なげかわしいことさ」

これにレミア代表が口を挟む。

「だが今回の一件でみんなの価値観を変える事ができる。これはチャンスともいえる。君らも自律気球に振り回されているだろうが、わたしらとは他所の国に振り回されているからね。この前だってシェービンググムースで歯を磨くところだったよ。君らにはどうしてこんな事が起こるのかわからないだろ？」

これにはジェフェギユの地区長が野次を飛ばす。

「循環社会の人の話はチンプンカンプンというのは本当だったようだな。しゃべらない自律気球と話していたほうがまだ意味がわかるよ」

ここでジャフェギユの代表が話に入ってきて場の空気が急に変わ

った。

「てめえらは本当に生きるのがへたくそだな。あんたらみたいのしかこの世にいらなくなったらどうなると思う？地獄だね。なあなんでもかんでもいいことやりにいつてもんじゃない。崇高な考えって奴も万能じゃねえと思うけどな」

これにはフォーチュンが割って入る。

「じゃあ、あんたらの生き方がいいっていつの？」

「そうじゃない。おれたちが、あんたらを絶滅させようとしたことがあったかい？ないだろ？」

「精神的には絶滅させられそうですかね」

「言えてるな！わっはっははは！」

タケニアの地区長とレミアの代表の意見が合って飲み屋にでも行きそつな雰囲気だ。

「冗談はおいといて絶滅させようとしたこともなければ、できないからやらないわけでもない。する意味がないからだ。わかるかい？」

「わたしはあなたたちさえいなければと思うときがあるけどね」

「そこところは俺たちのほうが勝つところだ。俺たちはそんなこと考えないからね。そりゃあんたらがいないと困るというものもあるが、要はね、あんたらは俺たちの対なのさ」



「対？」

「お互いがいないと困るってことさ。支え合ってる訳でもなければ、憎しみ会っているだけでもない。なああんた。なんでアンダーグロ―バルマナーなんてものが生まれたかわかるかい？」

「あんたたちみたいに稼げない人のためでしょ？」

「違うな。みんなが金持ちなんてことはあり得る話かい？」

「それは誰かが貧乏をなめるはめになるわね。そうならないように命掛けて頑張る所に生きるということの人の原動力があるんじゃないかしら」

「それは上手くないやり方だ。例えば生きるのにギリギリの奴が星にとつてなんかいいことをするかい？その生活から抜け出せるかい？抜け出せたとしてもまともに生きれる奴はほんの一握りさ。そいつを手本に頑張るなんて連鎖もあるが、よっぽどの外的要因がない限り全体的によくはならないね」

ステシーがこの言葉に会話に加わる。

「あんた何者？本当にジャフェギユの人なの？」

「正真正銘、ジャフェギユ出身さ。先祖はおよそ300年前くらいにジャフェギユに住み始めたらしいがね」

「いえ、あなたは普通のジャフェギユの人じゃない。ジャフェギユで暮らしていくのに必要のない力を持っているわ。例えば代表だからといってそこまで考えれて、そんなにペラペラ話せるのは明らかに

おかしい。あなたは何者？」

ステシーの厳しい問い詰めにジャフェギユ代表の顔つきが変わる。

「ふっふ。元キガのステシーさんにはすぐばれるだろうね。わたしは今でもキガに所属しているジャフェギユ代表だよ」

「何故、ジャフェギユにいてキガに入ろうなんて思うの？そんな発想は生まれてこないはずだし、第一、ジャフェギユのような地方で生活を送れば能力は限定されてきて、あなたのように視野は広くはない」

「あんたはキガでたしかバツ又止まりだったね。もう一個上のシンセまでいけばもっと視野が広がってだろうに。わたしは現役のシンセだ」

「・・・300年前にキガが送り込んだのね」

「視野が広がりつつあるようだ。3人のキガがジャフェギユに来て子孫をジャフェギユとともに育てていった。今ではキガに所属しているのは500人ほどかな」

「ということはタケニアにも昔、入植してきたキガがいるんでしょう？どれくらいいるの？」

「あそこにはジャフェギユよりも50年前に12人のキガが入ったらしい。それ以上のことはニツガしかわからないだろうね。自律気球も元はいえバキガのメンバーが考案したという話だ。人格プログラムはビンドピッドの系統が開発したそうだがね」

## スターライフスタンダード

衝撃の史実が次々と明らかになってくる。リコリネがどんなに頑張ってもどうにもできなかったことがタケニアチーム全員にわかってくる。フォーチュンもこの真実を見抜くことができなかっただろう。しかし、ステシーもそうだが目の前のキガのシンセからは邪悪なもの一切が感じられない。むしろ時代を通して世界を守ってきたもののような神々しさすら感じる。

「この三社会交流制度が安定するためには、これから200年が必要だ。あんたらの要望に応えるためには10人の未婚者が住みタケニア人と結婚して生活することが必要になる。リコリネとヒトコラが住んで、それに若いのが3人行くのも上手くいくかもしれない」

若い3人とはフォーチュン、ステシー、ペクトのことだ。フォーチュンはタケニアに長くかかるようであればタケニアに住み始めることを検討していたため、部下にもタケニアに住めるものを聞いていた。

「タケニアに残ってもいいと言ってくれた部下は15人いるわ」

「あんたはどうなんだい？」

「必要なら残るわ」

「ステシーは？」

「わたしもよ」

「リコリネたちが来たら少し未来が乱れるがね。これはヒトコラが原因だ。だがりコリネはそれをカバーする力を持っている。問題ないだろう」

フォーチュンは少し迷っている。リコリネやステシー、ペクトたちと一緒に生活できるとすれば、それは魅力を感じるが、自分にはまだまだいろんな世界をみたいという欲が胸の奥で騒いでいる。

「事務次長補、どうしますか？」

「実は事務次長が家族でタケニアに来るといつている。私たちもすでに相談は済ませて、ここで暮らすことにした」

リコリネが来るといつても、やはりまだ自分の気持ちを抑えきれない。

「ねえ、質問なんだけど私、タケニアの人とは結婚しても、うまくやっていけるとは思えないの。ウマが合わなさそうというか。どこかで結婚相手を見つけてからこっちで暮らしてもいい？」

「スギモリとリコリネ夫妻にあと1人若いのが来れば、もう無理に必要がない。おまえの好きなようにすればいいだろう」

「よく考えとくわ」

「これでお前たちも物事の筋道というのがわかっただろう。5年や10年で創れる社会など現実的にはあり得ない。せめて100年はかけないと成長するものはつくれないものだ」

「ビンドピッド先生ともこういう話合いをしてきてたのね」

「あいつは先祖が歴史という記録を残すことを始めにやったという噂すら持つ名家だ。君はあいつに助けられたのだろう。君があいつを助けたのかな？まあいつの日かお前も歴史に名を残すのかもしれないな。世界の秘密をバラした女として。だがいいタイミングだった」

「じゃ他の地方のキガとも、もう話が通るの？」

「君はまだキガには対応しきれてないようだね。元バツヌのステシ―ですら私のことを知らなかっただろう。何故だかわかるか？」

「・・・つながりを作るまでは知り合えない」

「そういうことだ。なんのためにつながりを持つかも重要だ。仕事を早く目処をつけたいとか世界を私の手で平和にしたいなどという動機では無理だろう」

「自分が何をしたいかによって未来が作られていくの？」

「そうだね。あんたこの話合いがまとまったから、あんたの仕事はもう終わりなんて思っただろう？」

「私は部下全員にこの会議を聞かせたわ」

「そう。君の仕事はここからはじまる。もし君も家庭を作りタケニアに来るのなら、これから君の一生を通じながら君が君でいる限りタケニアもどんどん良くなっていくだろう」

「スギモリ事務次長とリコリネ事務次長補が、それぞれ、わたしと

交代でロードをしてくれるみたい。わたしは最初の3年、指揮をとったらしばらくここを離れるわ」

「戻ってこられるかい？」

「この地方は面白いわ。私は結婚する気なんてなかったけど旦那を早く見つけてここで暮らしてみたい。子供も5人くらいつくってね」

「下手な指揮をしたら君の子供がいじめられるかもしれないよ」

「ダーリンに守ってもらおうよ」

「いい旦那を見つけることだ」

「それにしてもわたしたちのプランはどこかへ吹き飛んでしまったわね」

「君らが本気だということもわかったし、君のチームに無駄足を踏ませるようなことをしたくないと、君たちはニツガに思わせたのさ。リコリネの最初のプランや、あんたがチームの最初の会議で、全員とディスカッションする姿勢、自律気球の信念やその気持ちを汲み取ることができた君やステシーの決意などを見てね」

「なんでそんなことまで知っているの？」

「国連にキガの人間が入っていたとしても事情がわかってくれば、悪いことではないだろう？」

「まあ、今となってはね」

「だが私と君の関係を知らないものもいる。キガにもロゼにも国連にもね。気付いていない人たちにはまだ言わない方がいい」

「隠しておけと？」

「彼らのためだ。洞察力の育っていない者に余計な情報を与えればその者の個性を育てる障害となる。現に君も少し頭の中が混乱しているだろう。ステシーに比べれば君の目や手足はまだまだ未熟だからね。よく頭を整理してからタケニアの仕事に就くといい。なに、すっかりした知識、経験、それとよい姿勢からはたとえミスしても、よいミスしか生まれないよ。ミスが続けすぎでは駄目だが、君ならそんなことにはならないだろう」

「他の国連職員もみんな、あなたたちのことを悪く思ってるままになっちゃおうわよ」

「まだこんな時代だ。真実を打ち明けてよくなる状況じゃない。打ち明けれるような時代に私たちの手でしていくのだよ」

「すべてはみんなの幸せのためか」

「私たちも含めたな」

フォーチュンはなにか温かいものに包まれているような気持ちはここから来ていたことを知る。そして今度は自分たちが見守ってあげる番なのだということを素直に受け止められた。シンセは大きく息を吸ってからフォーチュンの顔から目線を背けて話す。

「なああんだ、人にとってこの世で一番大事なものは何だと思う？」

「・・・さあなんでしょうね。自分の生き様かな？」

「人の思いとかなんだろうかな。他の動物や自律気球が頑張っても、過去に人間が起こした問題を清算できるのは恐らく我々しかない。この世は我々の作り上げたものでもあれば、我々の過ちのなれの果てでもあるからね。どんな問題でも過ちを犯したものが直さなければだめだと私は思っている」

「今回の会議で決定によって生まれる生活が、星に生きる私たちにとつてもっともスタンダードな生き方に近くなるのかも」

「おそらくな。資本社会地方が生きるという価値を作り出し続け、循環社会地方が星を想い、キガが行動を起こせる地盤をつくり、自律気球が身を犠牲にしながら行動し、ロゼが人々を導き、共産社会地方がバランスをとつて、最後にそれをフォーチュン（幸運）が自律気球を含めた我々全員をここに集めた。こうした流れがスターライフスタンダード（星で生きるうえでの基本姿勢）へと成長することを願おう」

いろんな視界がフォーチュンには生まれてくる。次々に疑問の残っていたパーツも埋まっていく。だがうまくまとまらない部分があるのはフォーチュンがまだ経験していない、成長しきれてない所が残っているからだろう。まだ少し整理のつかない頭の中でもフォーチュンはこの言葉を吐いてみせる。

「願うのではない。育て上げるのですよ。さあ、会議をはじめましょうー！」



## エピソード

新しく生まれたばかりの森の中で始まった会議で、国連タケニアチームにジャフェギユからもキガのメンバーをリーダーとしたチームが来ることにより交流期に向けて調整を行うことに決まった。レミアは2つの地域が溶け合った後、足りなくなったところを補う形をとることを約束してくれた。そして自律気球には、人との会話も許可が下り、墜落事故はまだ0にはなっていないが確実に減っている。

フォーチュンは休みの日はミグに乗って、部下と一緒に小さな旅行を楽しんでいる。ミグもフォーチュンに話したいことが多かったらしく、いつも仲良く話している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2156x/>

---

Miss.フォーチュン      自律気球編

2011年11月17日19時32分発行